



Title	新出「浪花名所図屏風」の研究
Author(s)	長谷, 洋一, 黒田, 一充, 林, 武文, 井浦, 崇, 橋寺, 知子, 藪田, 貫, エームケ, フランツィスカ, 森本, 幾子, 谷, 直樹, 平尾, 修悟
Citation	
Issue Date	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10067">http://hdl.handle.net/10112/10067</a>
Rights	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

## 目次

新出「浪花名所図屏風」	1
「浪花名所図屏風」名所配置図（水田憲志 作成）	29
フランツィスカ・エームケ 新発見「浪花名所図屏風」	31
黒田一充 「浪花名所図屏風」と名所図会	33
井浦 崇・平尾修悟 「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について	34
林 武文 摂津名所図会データベースの開発	36
藪田 貫 「浪花名所図屏風」と「大坂図」	38
橋寺知子 「浪花名所図屏風」に描かれた街並み	40
森本幾子 「浪花名所図屏風」に描かれた船について	41
長谷洋一 孤例の屏風「浪速名所図屏風」	50
《特別寄稿》	
谷 直樹「浪花名所図屏風」発見の意味	53
二つの屏風が語る大坂～「豊臣期大坂図屏風」と「浪花名所図屏風」～	
《講演録》新発見「浪花名所図屏風」ケルン大学名誉教授 フランツィスカ・エームケ	59

---

## 凡例

本書は平成27年度関西大学創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）による「新出『浪花名所図屏風』の調査・研究」の研究成果報告書である。

### 研究代表者

長谷洋一 文学部・教授

### 研究分担者

黒田一充 文学部・教授

林 武文 総合情報学部・教授

井浦 崇 総合情報学部・准教授

橋寺知子 環境都市工学部・准教授

藪田 貫 関西大学名誉教授

Ehmcke, Franziska ケルン大学名誉教授

森本幾子 尾道市立大学・講師

\* 本書では、一双の屏風の向かって右側を右隻、左側を左隻とし、各隻を構成するパネルを向かって右から順に第1扇、第2扇…と数えている。

# 新発見「浪花名所図屏風」

ケルン大学名誉教授 フランツィスカ・エームケ

新発見の「浪花名所図屏風」は六曲一双で、19世紀前半の大坂全域の浪花名所から、百カ所以上の名所を鳥瞰図的に描いた類例の無い唯一の名所図屏風である。一隻の大きさは縁を含めて高さ176cm、長さ375.5cmの本間屏風である。金泥を使用した「浪花名所図屏風」はハレの空間を表わし、繁栄絶頂期の天下太平の大坂が表現されている。それを証明するかのように、ケの象徴である物乞いする乞食や大道芸人、または傷んだ家屋などは描かれていない。又これまでの名所風俗画屏風ではなく、人物像が少ない名所風景画屏風といえる新風の名所図屏風でもある。さらに観賞する人が細部を眺めた時に、一見してどの名所か判断できるように、絵師は各名所の特徴や事実を入念に正確に描写している。

「浪花名所図屏風」は大坂城、四天王寺、住吉大社、天満宮の四大名所を基柱として構成されている。左隻は西横堀川から東の市街を俯瞰した構図で、北の天満宮から南の四天王寺までが描かれている。右隻では上部に今宮蛭子宮から住吉大社までの南の名所を、下部には西横堀川から西の名所を近接させて描いている。したがって右隻の上下には地理的な断絶がある。また大坂の経済繁栄と河川交通の発達的重要性を強調するため、左隻に大川、右隻に安治川の流れを画面に大きく割り、河川を埋め尽くすように各種の船を沢山描いている。

裕福な大坂商人達は富を蓄積し、その余力を芝居、廓、食文化、物見遊山等の趣味や娯楽に向けた。寺社や名所等が今でいう観光地化され、祭りなども豪華になっていった。文政9年(1826)に大坂を訪れたシー

ボルト(Philipp Franz Von Siebold、1796 - 1866)は「江戸参府紀行」に“大衆的な娯楽場は江戸の場合よりいちだんと輝かしい光彩を浴びている。いくつかの劇場、茶屋、料亭は盛んに客を呼んでいる。舟遊びや種々の曲芸師、奇術師は大衆的な娯楽のためにめいめい役割を果たしている”と記している。そうした消費文化の発達を反映して、輸送や交通網が整備され、旅をする人口も増加し、江戸中期から大坂は旅や観光の目的地、または参詣、巡礼の出発地として、人が一番多く集まる大都市になった。

旅人口の増加、交通網や宿泊施設の発達、名所の観光化と関連して、必然的に18世紀末か

ら名所記、名所図絵等が出版されていくのである。「浪花名所図屏風」は、それらの出版本の流行に影響されて制作された名所風景画である。それを裏付けるように、秋里籬島（生没年未詳）著の「摂津名所図絵」（1796 - 1798年刊）から、多くの挿絵の構図を利用または参考にしている。

さて通常、屏風には四季が盛り込まれる。それをこの屏風で見ると、正月の猿回し、今宮蛭子宮の十日戎祭。春は杉山における二月初午の行楽と風揚げ、天満宮と座摩神社の梅、野中の桃畑、桃谷の桃、桜宮の桜、野田の藤。夏は南御堂のキリシマサツキツツジ、了徳院と茨住吉社の杜若、阿弥陀池の蓮、長峽浦の潮湯（泥湯）、それに難波橋の納涼船である。秋の紅葉と冬の雪は表現されていない。

屏風の景観年代を考察してみると、天明3年（1783）に東横堀川入口に架けられた葎屋橋は、船の通行が多いことから、文化元年（1804）の架け替えでは橋脚を無くし、橋脚の無い橋として名所になった。

天保9年（1838）の架け替えのときは中央の橋脚一本とした。屏風に描かれた葎屋橋には橋脚が無いことから、景観年代をまず1804年 - 1838年と仮定できる。さらに史実として四天王寺は享和元年（1801）に落雷で焼失、再建は文化九年（1812）。住吉大社は享和二年（1802）に火災で焼失、文化七年（1810）に再建された。また天満宮は天保8年（1837）の大塩平八郎（1793 - 1837）の乱で焼失、弘化2年（1845）に再建されている。屏風に描かれた天満宮の本社は「摂津名所図絵」の挿絵と照合すると、焼失する前の姿である事実から、大塩焼以前に三つの寺社が同時に存在する1812年 - 1837年間が景観年代であると確定できる。今後の研究では、「浪花名所図屏風」を色んな視点から考察することが必要とされ、大坂町人文化史、大坂建築史、大坂美術史、特に大坂名所を研究する上で重要な資料となるだろう。

# 『浪花名所図屏風』と名所図会

黒田 一充

『浪花名所図屏風』は、左隻・右隻の両方を並べると、大坂湾から眺めた大坂の風景が描かれている。すなわち西側から東側を眺めた風景で、左隻を北、右隻を南にして大坂の名所が描かれている。具体的には、左隻の第六扇（左端）の上段に桜宮、中段に天満天神が描かれ、画面を右に進むにつれ、上段には大坂城から四天王寺まで、中段には大川に架かる橋や船場の町、下段には大川に浮かぶ船や難波御堂や新町廓の風景が描かれる。右隻は、今宮戎社や阿弥陀池和光寺、堂島や永代浜、雑魚場の市場や安治川河口の風景から住吉神社と高灯籠からさらに紀州街道を南へ進んで、大和川とそこに架かる大和橋を渡って、堺側に入ったところの町家までの風景が描かれている。

ただし、ここで描かれた施設等の位置は、必ずしも実際の地理と一致するものではない。例えば、右隻の第一扇と第二扇は安治川河口に浮かぶ多数の菱垣廻船が見えるが、実際の地形だと第四扇のところで、画面の下部に流れてくるはずの川が、下段でL字に向きを変え、画面の右端に流れるように描かれている。また、安治川河口の風景の上部に描かれた、第二扇の金雲に囲まれた場面は、海水につかる人びととともに海岸に注連を張った忌竹が見えることから、長峡浦での潮干しの様子だと思われる。長峡浦は住吉神社の西側社前の海岸であることから、実際には高灯籠の下に描かれるはずだが、画面配置の関係で、堺の町の右手に位置をずらしている。

江戸時代後期になると、木版印刷による出版が盛んになり、伊勢詣や西国三十三ヶ所の札所巡りなど寺社仏閣への参詣や旅行の流行が背景となって、名所案内をするための絵入りのガイドブックが発刊されるようになった。秋里籬島が著し、竹原春朝斎が挿絵を描いた『京名所図会』が安永9年(1780)に発刊されて好評を博し、版元の吉野屋為八は『大和名所図会』(寛政3年・1791)、『和泉名所図会』(寛政8年・1796)、『摂津名所図会』(寛政8年・1796)と、この両者による名所図会を次々発刊した。さらに他の版元も各地の名所図会を発刊するようになり、幕末にかけて多数の作品が発表された。この大坂を描いた屏風は、江戸時代後期から幕末にかけて制作された作品で、寺社や橋、市場や芝居町、遊郭などの風景が描かれているため、『浪花名所図屏風』と名付けられたが、その風景はそのころ盛んに発刊されていた名所図会の影響を強く受けていた。

屏風の場面を『摂津名所図会』の挿絵と比べてみると、安治川河口の菱垣廻船は、名所図会の安治川河口や安治川橋の風景とよく似ている。大川に浮かぶ御座船も、名所図会には琉球人を乗せてきた御座船が描かれている。屏風の四天王寺の風景も、名所図会の四天王寺伽藍図を少し建物の角度を変えて切り抜いたものである。新町廓の風景にも、名所図会と同じ花魁道中が描かれており、天満天神の本殿の描かれる方向は、名所図会と同じである。これらは『摂津名所図会』の挿絵を参照した可能性が強い。もちろん、異なる場面もある。高麗橋は橋のところにある矢倉屋敷が有名だが、名所図会は西側からの景色に対し、屏風は東側からの景色になっている。屏風の画面は西側からの視点になっているはずなのに、反対になっている。これは屏風の画家が実際に現地へ出掛けてスケッチをしたのではなく、名所図会の挿絵などを参考にしながら画面に名所をはめ込んでいったのだと思われる。

『摂津名所図会』の挿絵の中から屏風の場面と一致する場所を選び出し、画面の比較を行った。今後、多数残っている名所図会をはじめとした挿絵がある近世の出版物を分析すると、さらに屏風の参考にした題材が明らかになっていくと考える。あわせて、『浪花名所図屏風』と『摂津名所図会』の似ている場面と似ていない場面の両方をふくめてデジタルコンテンツを作成して公開した。今後の研究の広がりを期待したい。

# 「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について

井浦 崇・平尾 修悟

## 1. はじめに

『浪花名所図屏風』は、江戸時代の後期から幕末に描かれた作品と考えられ、寺社仏閣や市場、川とそこに架かる橋の風景、市場、芝居町、遊郭など、大坂の名所がパノラマ的に描かれている類例のない唯一の屏風である。この屏風について現在の地図、風景と比較するデジタルコンテンツを制作した。

また、浪花名所図屏風における風景を描くにあたって、画家は何冊かの出版物の挿絵などを参考にしたと考えられており、参考にした可能性が強い『摂津名所図会』（寛政8年・1796）と浪花名所図屏風を比較するデジタルコンテンツも制作した。

どちらも制作にはFalshを用いて制作し、鑑賞者が知りたいポイント、気になる点をクリックすることで解説文や図が表示されるコンテンツとなっている。

## 2. 現在の地図との比較

浪花名所図屏風は右隻と左隻からなるため、それぞれの位置関係がよりわかりやすくなるように制作した。

また今回は屏風を基準として比較を行ったため、現在地図の角度を変え、屏風全体がどの方角から見た風景にあたるか想像できるようになっている。



図1. 屏風の構図と現在地図との比較（左） 各名所の比較（右）

全体の主な構成は、1. 浪花名所図屏風のおおまかな解説、2. 屏風の構図と現在地図との比較、3. 各名所と現在地図との比較、の三部構成になっている。2. 屏風の構図と現在地図との比較では、大坂城、四天王寺、住吉社といった現在地図の主要な地理情報と対照して見せることで、屏風に描かれた風景と現在の地理との関係性を強調した。3. 各名所と現在地図との比較では、屏風中の各名所についてより詳細に現在の風景と比較できる構成とした。屏風中に描かれている名所にカーソルを重ねることで、現在地図のどの場所にあたる風景か円で

囲うようにして表示されるようにした。また、名所をクリックすることで、屏風に描かれた名所の拡大図と、該当する場所の現在の風景を合わせて表示した。ここで表示される現在の風景は実際に現地で撮影を行ったものであり、天満天神など、名所によっては屏風に描かれた風景の面影を持った場所も存在した。

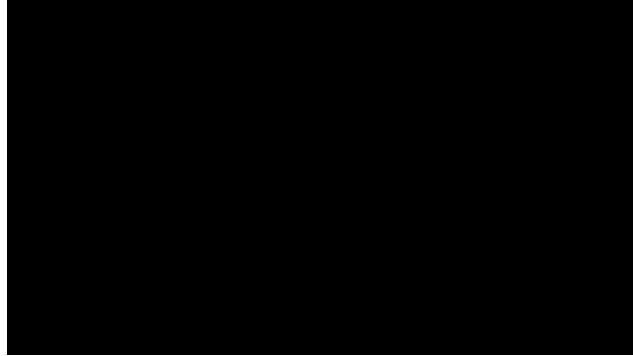


図2. 天満天神の比較詳細

### 3. 『撰津名所図会』との比較

『浪花名所図屏風』とそれを描く際に参考にされたという『撰津名所図会』を比較したデジタルコンテンツを制作した。

ここでは現在地図上に名所のラベルを配置し、クリックすることで、浪花名所図屏風の拡大画像と、撰津名所図会の参考にされたという資料を表示する。配置されたラベルは現在地図上の広域に渡るため、画面内左下の矢印にカーソルを重ねることで画面上の地図を移動しながらコンテンツを操作できるようにした。

また、画面上部のタイトルをクリックすることで、本デジタルコンテンツの解説文が表示される。



図3. 撰津名所図会との比較 全景と詳細

本コンテンツにおける比較では浪花名所図屏風と撰津名所図会の各資料が似ている場面が多く、撰津名所図会を参考にして浪花名所図屏風が描かれたことがよくわかる内容になった。

# 摂津名所図会データベースの開発

林 武文

## 1. 概要

本データベースは、関西大学なにわ大阪研究センターが所蔵する『摂津名所図会』九卷十二冊のうち、現在の大阪市域にあたる巻之一から巻之四を選び、祭礼・法会、信仰、民俗行事、興行、商業、産物、名勝などに関する挿絵 106 点を掲載し、項目を付して公開するものである。キーワード検索とカテゴリ検索により挿絵画像と各種情報の詳細表示を行うとともに、地図機能として Google Map 上に現在の位置と Web 情報の提示を可能としている。

## 2. 開発環境

データベース・プラットフォームとして MySQL5.6 を、また開発言語として PHP5.4 と JavaScript（総合開発環境：Eclipse 3.7 Indigo, 日本語化パッケージ：Pleiades）を用いて Web サイトを構築した。運用サーバは Red Hat Linux (<https://lolipop.jp/>) である。文字コードは HTML5 で推奨される UTF-8 を用いた。

## 3. システムの機能

### 3.1 検索ページ

トップページ（図 1）の「データベース」ボタンを選択すると検索ページ（図 2）が表示され、掲載されている摂津名所図会挿絵全件の一覧表が表示される。一覧表の項目は以下の通りである。

- 「番号」…………… 通し番号：1～106
- 「場所名」…………… 摂津名所図会に記載された場所名
- 「項目名」…………… 摂津名所図会に描かれた挿絵の内容
- 「出典」…………… 巻名：巻之一～巻之四
- 「カテゴリ」……… 信仰、名勝、商業、民族行事、産物、祭礼・法会・興業の 8 分類
- 「現代地域」……… 現在の大阪の区名

一覧表の各欄をクリックすると、個別の画像とデータが掲載された詳細ページ（図 3）が表示される。

データベースの検索機能は以下の通りである。

#### ・キーワード検索

キーワード欄に語句を入力し、テキスト情報全てに対して部分一致検索を行う。

#### ・カテゴリ検索

「出典での絞り込み」、「カテゴリでの絞り込み」、「現代地域での絞り込み」のメニューを設けた。これらをプルダウンで選択し、検索可能とした。

#### ・ページャ機能

画面下部の数字をクリックし、ページ遷移を行う。一画面に表示する項目名・表示件数を設定する。



### 3.2 データ表示機能

検索ページから遷移する詳細ページにおいて、一覧表の各項目情報に加えて、挿絵画像のサムネイル、記述されている文章のテキスト表示、研究叢書（なにわ大阪研究センター刊）の該当するページ番号が表示される。また、挿絵画像のサムネイルをクリックすると高解像度の画像が表示されるようにした。

### 3.3 地図機能

データベースの項目には、場所名に加えて現在の位置情報（緯度・経度）も記述している。詳細ページの「場所名」の欄をクリックすると、対応する Google Map のウィンドウが開かれ、現在の地図上に位置と名称が表示されるようにした。これにより、Google Map と Google Earth の機能を用いた現在の航空写真表示、ストリートビュー表示や付帯する Web 情報の表示も可能としている。

## 4. 公開

2016年4月より関西大学なにわ大阪研究センターのホームページにて公開予定である。  
(設置 URL : <http://haya.bitter.jp/smzDB/>)

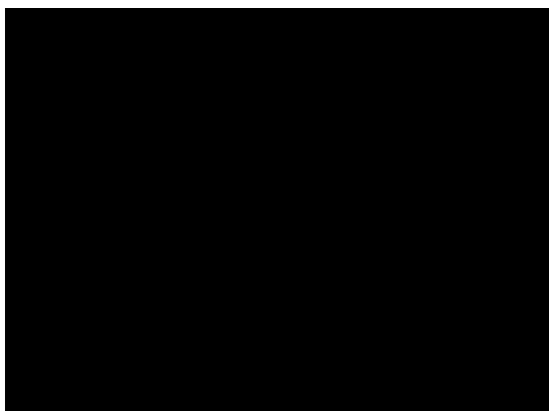


図1. トップページ

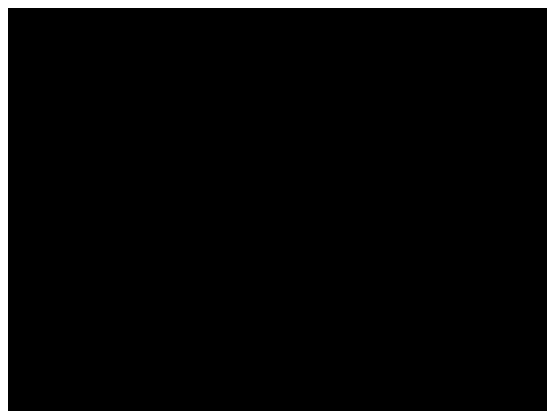


図2. 検索ページ

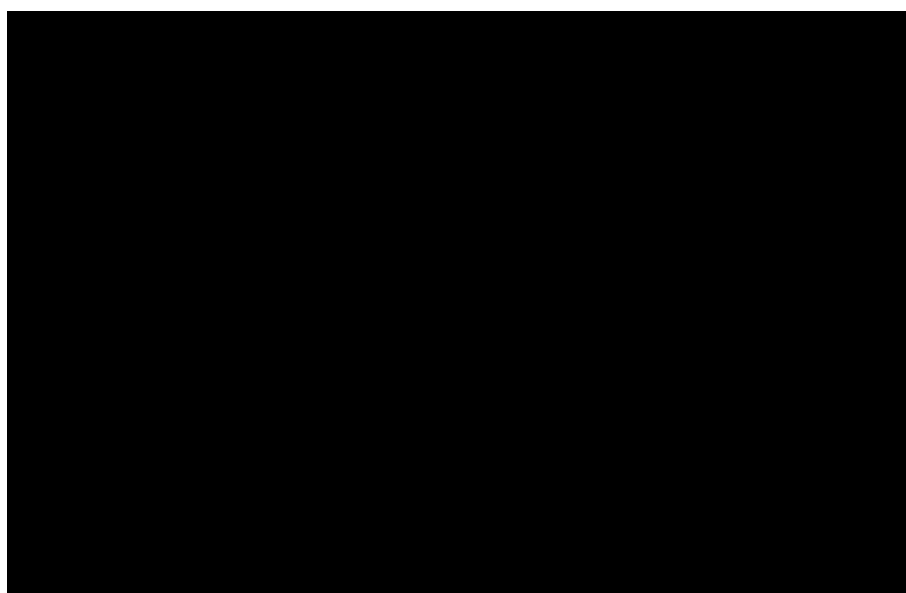


図3. 詳細ページ

## 「浪花名所図屏風」と「大坂図」

藪田 貫

新出の「浪花名所図屏風」六曲一双をつらつら眺めていて思い付いたのは、江戸時代に木版で刊行されている各種の「大坂図」と対比してみればどうか、ということであった。というのも、西側の大阪湾に視点を定め、北西から南東に視野を広げれば、北は桜宮・天満宮から南は住吉大社までが左隻・右隻の画面に収まるからである。大阪湾上に視点を置くことは、「大坂図」にとって異例ではない。むしろ、北から南へ展開する「京都図」と比べれば、西から東へ展開するのが「大坂図」の通例ではないか。そうすると屏風の作者は、刊行「大坂図」を念頭に、この屏風を構想したのではないか？

この思い付きが頭に浮んだとき、偶然にも、江戸時代の大阪図を集大成した『近世刊行大阪図集成』（小野田一幸・上杉和央編著、創元社、2015年）について推薦の辞を書くこととなった。収載された100点を超える大阪図を繰っていると、最古の「新版撰津大坂東西南北町嶋之図」（明暦元年）や「貞享図」（貞享年間）は、どちらも東から西へ展開している（「東西図」と呼称）。したがって大阪城が地図の頂点に位置し、大川が一気に流れ下ってきて大阪湾に注ぎ、その間の左右に天満組・北組・南組の約600の町々が櫛比するという画面構成になる。中津川まで入れるかどうかには違いがあるが、画面下に九条島・寺島が座り、帆船や川船までもが目に飛び込み、インパクトを与える。

ところが一転して、北から南に展開する大阪図（「南北図」と呼称）も、後期には登場する。「文政新改図」（文政から天保年間に版行）がそれで、天満から大川を越え、船場・島之内・天王寺へと視界が南下する。現代の北を上にする地図に見慣れた目には、不思議な感じを受ける。左右はといえば、左に大阪城と上町、右に安治川河口と中津川までが収められるが、「東西図」から受ける大阪城や大阪湾のイメージが希薄である。どちらかといえば「南北図」は、天満組・北組・南組の大阪三郷に関心が集中している印象を受ける。この図に大阪町奉行所の絵図師が関わっていることも、都市への関心の深さを物語っている。

視点を西（海）に置くか、北に置くかでは異なるが、「東西図」「南北図」とも、南の端が四天王寺であることでは共通している。つまり住吉大社に及んでいないという限界がある。しかし、「大坂名所」として地図化を考えたとき、それを落とすことはできない。だが、四天王寺からの距離が離れすぎている。したがって都市図としての大阪図を見渡しても、大阪三郷とともに住吉大社を視野に収めた地図を確認することができない。ここで「大坂図」から「浪花名所図屏風」へ連続するという、わたしの思い付きは壁にぶつかる。

ところがである。『近世刊行大阪図集成』に収められた一点の図が、その壁を飛び越えさせてくれるヒントに満ちている。「大湊一覧」という外題が付けられたもので、「視点は大阪湾の上空に定め、大阪市中と堺に連なる海岸辺を近景に、遠景を生駒の山並みとする」。タテ60cm、ヨコ100cmの大きな画面の手前にひろく大阪湾を描き、そこから多数の帆船が、三筋となって河口を遡って行く。左が安治川、中央が木津川、そして右手に小さく堺湊への入港が描かれ、新大和川には船影がない。とりわけ安治川と木津川に入ろうとする帆船は数珠つなぎで描かれ、両河川がまさに「天下の台所」大阪の大動脈であったことを強調している。二つの川が交差するところから奥（東）は、塊状となって大阪市街が描かれ、対照的に天王寺から堺にかけては、紀州街道沿いに広大な農地が描かれ、海岸部の新田に至り、新田の先、安治川河

口に天保山が描かれている。幸い、天保五年という年紀とともに阪上九山による「題浪華新丘図并引」と書かれた題箋が付けられ、本図の作成動機が天保二年の大川浚えによる新丘天保山の築造にあったことが示されている。

披而覽、焉不啻綠柳紅花之美、去帆來舶之盛而已、他及墨江荒陵野勝、  
河嶺疆洋之秀、皆錘而在隻掌中

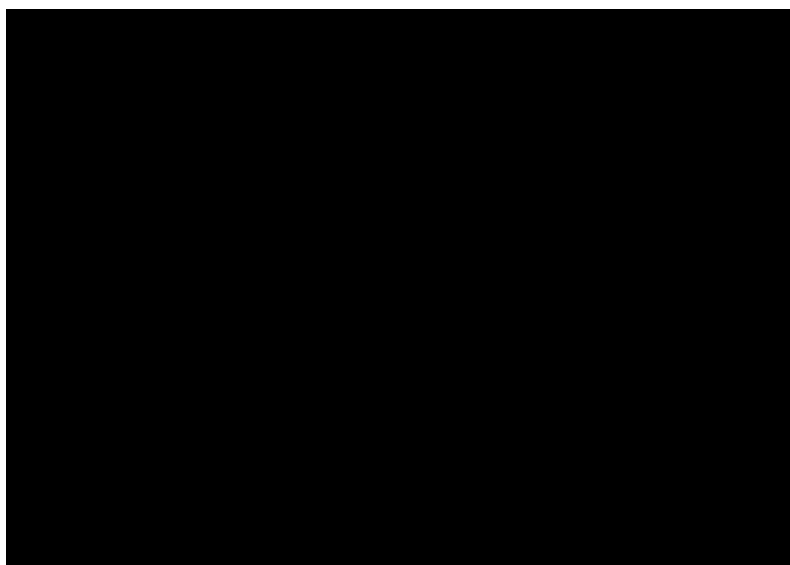
この一節には、四季の美しさや輻輳する船舶のみならず、住吉大社・四天王寺の名勝、茅渚浦（大坂湾）や生駒の山並みがすべて、一望のもとに収められているとの自負が語られている。絵図の作者は山長こと中川山長、大坂画壇を構成する画家上田公長（1788～1850）の門人。したがって絵図師の作というよりは、画家の作品である。「題浪華新丘図并引」によれば、もともと「遠客之需」に応じて描いたが、完成後、その客が木版彩色して出版することを求めた。当初、自分はそれを許可しなかったが、再三、懇請されて認めたとある。つまり「大湊一覽」は、画人中川山長の肉筆図として描かれ、のちに木版彩色して書肆の大店河内屋喜兵衛などの合版として刊行されたのである。凡例には山長の手で、「浪華ノ地位南北長遠ニシテ東西ハ短狭ナリ」という理由で「西洋ヨリ眺望」したと断っている。

ここには地図の世界＝約束事が、画家によって大きく変更された事情が示されており、しかもその変更が、大坂の人でない「遠客」の注文から始まったことが示されている。

新出の「浪花名所図屏風」六曲一双をつらつら眺めて思い付いたわたしのもうひとつの着想は、廻船をこれだけ目立たせる屏風の注文主は、大坂以外の人だろうということであったが、この着想も、「大湊一覽」を念頭におけばあながち荒唐無稽ではないだろう。

しかし、これは屏風であって、平面に展開する絵図ではない。しかも左隻と右隻に描き分けている。だとすれば、フランツィスカ・エームケ氏によって挙げられた100を超える名所地点、しかも北は桜宮と天満宮から南は住吉大社、西は大坂湾と安治川・木津川河口から信貴・生駒の山並みまでがどのように、六曲一双の画面に収められているかが、疑問として残る。その回答を得るためには、107地点を現代の大坂図に落としてみることだろうと考え、地理学者水田憲志氏に依頼して進められたその作業は、完全な回答を導き出した。

それは左隻に前景を、右隻に後景を描き分けるという工夫であり、その交叉点は大坂市中に置かれている。詳しくは別項を参照してほしいが、納得である。氏名不詳だが、絵師がこの屏風に込めた謎が、一瞬、解けた気がした。



# 「浪花名所図屏風」に描かれた街並み

橋寺 知子

ここで主題とする「浪花名所図屏風」は、19世紀前半期の大坂の様子を描いたものである。19世紀末には、日本は、開国や徳川幕府の瓦解によって、社会も街並みも大きく変容するが、その一歩前の大坂の風景ということになる。本稿では、描かれた街並みと建造物の特徴を述べたい。

まずこの屏風で目をひくのは、船の多さと密集する瓦葺きの家々である。大坂の都市的特徴の一つは川の存在である。本屏風では淀川（現・大川）が左隻第六扇から右方向へ流れ込み、大坂の三大橋、天満橋、天神橋、難波橋があり、京への出発点である八軒屋浜が見え、そこには舟がひしめくように描かれている。第六扇には西横堀川と長堀川の交差点に四ツ橋があり、市中に縦横に整備されていた堀川も、要所に描かれている。左隻第一扇・第二扇は大阪湾で、帆をあげた菱垣廻船が多数描かれ、人と物が行き交う大坂の町が表現されている。建物の屋根はほとんどすべて黒く、瓦葺きと判断できる。中心部は建物が密集して描かれ、活動の活発さと経済力が示されている。左隻左下の天満や左隻中央部の船場の商家には、敷地の最も奥に蔵が描かれ、高さも母屋より高く、目立っている。蔵のある街並みは、京を描く屏風にはない特徴と言える。堀川沿いの蔵は、大坂では平側を堀川に平行に配し、川岸の傾斜の上に張り出すようにつくる足駄造りという建て方が特徴的だが、本屏風でもその様子が忠実に描かれている。商家の店先には瓦屋根をさらに伸長するように木造の庇が付いている。道路上に突出した軒は、明治期以降「軒切り」で整理されるが、近世末の大坂の商業の中心地区の様子がわかる。

大坂城や天満天満宮、四天王寺、住吉大社などの大坂のランドマークは、すぐ分かる特徴をもって描かれている。左隻第四扇には高麗橋とその象徴とも言える2棟の矢倉屋敷があり、船場の位置が示される。左隻第一扇には櫓と梵天を戴く道頓堀の芝居小屋と水辺のいろは茶屋、同扇の最下部には「太夫の道中」が描かれ、新町の遊郭と判断できる。右隻第六扇の四ツ橋付近には、お土産として有名なキセル屋が、第五扇には活気ある魚市場（雑喉場）が描かれ、都会らしい雰囲気がある。前述の天満宮、四天王寺、住吉大社だけでなく、東本願寺（南御堂）や高津宮、阿弥陀池和光寺など、大小さまざまな社寺が描かれている。社寺は信仰の対象だが、江戸期には「行楽地」でもある。特に天満宮の境内には、露店のようなものや見物客が多く描かれている。本屏風に描かれた名所は、18世紀末の『摂津名所図会』での描かれ方と重なる点も多い。今後、比較検討することで、本屏風の特徴が明らかになると思える。

右隻左隻とも、上部には、遠景として生駒の山並みが描かれ、中景には淀川沿いの桜や満開の桃谷の桃、右隻では住吉の浜で水に入る大勢の人々と茶屋など、大坂近郊の自然の風趣に富んだ風景が配されている。山の緑と、川・海の青に挟まれた江戸時代後期の大坂は、経済の中心地であると同時に、都市生活の愉しみも豊富で、物見遊山に事欠かない観光都市、まさに「日本のパリ」だったと、この屏風の風景は感じさせてくれる。

本稿は2015年11月9日に開催されたシンポジウム「二つの屏風が語る大阪～「豊臣期大坂図屏風」と「浪速名所図屏風」～」におけるフランツィスカ・エームケ先生、谷直樹先生のご講演に多くを負っている。記して謝意を表したい。

# 「浪花名所図屏風」に描かれた船について

尾道市立大学 森本 幾子

この屏風は、左隻には大川、右隻には安治川口と思われる部分を大きく配置し、そこに多くの船が所せましと描かれていることに特徴がある。フランツィスカ・エームケ氏の見解にしたがって<sup>(1)</sup>、この屏風が19世紀前半～中期頃の大坂を描いたものだと仮定して、左隻・右隻それぞれに描かれた可能性のある船々についてみていきたい。

文末の表1-①には、19世紀前期～中期頃に大坂両川口に入津していた主な廻船を、表1-②には、大川沿いを運航していた主な川船について、それぞれ取り上げた。また、表2には、『改正日本航路細見記』（天保13年（1842）・須原屋茂兵衛板）<sup>(2)</sup>をもとに、各廻船の大坂着場所を示しているのので、以下それぞれを参照しながら考えていきたい。

## ①右隻右下部（第一扇・第二扇）の船 —安治川口の船—

屏風の右隻には、左側から、あみだ池（和光寺）・四ツ橋・雑喉場魚市場・住吉大社などの名所が描かれている。これら名所の配置から判断すれば、右下の船々が停泊している位置は、安治川口ということになる。屏風右上部からは白帆をあげた船々が続々と大坂に向かって入津する様子が描かれ、大阪湾からそれに連なる瀬戸内海を表現しているものと考えられる。ここに描かれている廻船は、その描写からすると、一般に「弁才船」と呼ばれるもので、17世紀末から18世紀初めに、日本全国における海運網が展開される中、全国的に普及していった和船である<sup>(3)</sup>。

18世紀後半に刊行された『摂津名所図会』にも、「安治川橋」・「安治川口諸船入津」の箇所に、安治川橋より西にたたずむ弁才船、白帆をあげて大坂川口へ入津する多くの弁才船がそれぞれ描かれ、もう一つの川口である木津川とともに、ここが「難波津」・「大湊」とよばれるようになったことが述べられている。ここで、『摂津名所図会』の河口に関する部分を繙いてみよう<sup>(4)</sup>。

河海の喉口にして両所あり。一つは安治川といふ。大川筋・土佐堀・蜷川等の下流なり。一つは木津川といふ。長堀・道頓堀及び西の方船を以て諸流、こゝに帰会す。諸国の廻船、こゝにつどひて碇石を卸し、これより行季船・三板船を以て、五穀雜貨を問屋へ運送す。千石・二千石の大船、水上に町小路を作りたる如く、桅竿は北斗を指し、上下は欄紋をもつて自在し、鶴首には船の名・家々の紋付で、其国々をしらせ、風威の順不順・潮時の満干を考て、出帆あり着船あり。両河口、共に官家の監船所ありて、海船の甲乙、あるは新艘の船おろしの祝ひまでも、みな両河口の賑ひ也。其連船の中を尖頭舟漕つれく、酒・肴・麩類・野菜の物までも、売ありく其声喧し。又、其船に遊女・土妓を乗せて、三弦おかしく弾せ、何やら声を発て喚あり。これを土俗、伽遣船といふ。むかしの川末の江口也。難波津、大湊となれるは、此河口の泊船の連なるにてしらるべし。

この説明からすると、安治川と木津川両川口では、「千石」「二千石」の諸国の大船が「桅竿」（帆柱）を立てて出船入船で賑わっており、その間を「行季船」（上荷船）や「三板船」（伝馬船）が控え、大船から荷物を積み替えて、大坂市中の問屋へ運送していたことが分かる。

屏風右下に描かれた場面をよく観察すると、確かに、弁才船と思われる大船と、上荷船、伝

馬船と思われる小船がそれぞれきちんと描かれてある。まさに、『撰津名所図会』に記された通りの場面である。

さて、安治川口に停泊し、大坂を代表する廻船と言え、「菱垣廻船」「樽廻船」が有名である（特徴については、表1-①を参照）。表2に示したように、天保13年（1842）の『改正日本航路細見記』によると、「江戸廻船并菱垣船樽船」の大坂着場所は、「安治川のしも」となっている。しかし、「菱垣廻船」には、「垣立」部分に、トレードマークである菱組の格子があるはずだが、この屏風に描かれている廻船には、それは見当たらない。ということは、それ以外の廻船であるか、もしくは、天保12年（1841）の株仲間解散令によって「菱垣」のトレードマークが廃止された後の廻船であるということも考えられる。

表2を参考にすると、この頃、安治川口に停泊した可能性のある廻船は、「江戸廻船并菱垣樽船」のほか、廻船の大坂着場所としてはっきりと「安治川」という名がみられる「備前岡山船」・「備後鞆船并福山尾道船」などがあるが、大川沿いに着場所のある諸国の船も、安治川口に停泊して荷物を積み替えていたものと思われる。安治川は、もともと御城米を大坂に運ぶことを目的として整備されたので、格式の高い、つまり、幕府と関係の深い廻船が優先されていたようにも考えられる。屏風には、これらの廻船が多く描かれた場所に橋がみえるが（第三扇）、これは安治川橋であろうか。当時、安治川橋までは、弁才船が入津できたので、19世紀には、菱垣廻船・樽廻船・御城米船のほか、諸国廻船など様々な種類の廻船が、安治川口に停泊していたのであろう。

また、19世紀という時期に留意すると、この時期、大坂に多数入津していた廻船として、日本海地域を本拠とした北前船があげられる。北前船は、商品生産力の向上にともない、地域間流通が活発になるにつれて勢力を伸ばしてきた船で、諸国廻船とともに、当時の日本経済の発達ぶりを示すものであった<sup>(5)</sup>。19世紀には、畿内・瀬戸内地域における綿・菜種・藍・い草等の生産量増加のため、魚肥が大量に必要とされ、北海道産の鯡粕が多量に施肥されるようになった。大坂は、鯡魚肥流通を担った北前船の商売の拠点となり、北前船は、冬場は大坂で船囲いをし、春になると、再び日本海へ向けて出帆した。

時代は少し先になるが、嘉永7年（1854）11月に、大坂で大地震が起り、大津波が発生した。この時の大坂の被害状況を、地元へ伝えた商人の書状をみると、安治川・木津川両川口とも、津波によって、約1,500艘もの船が被害に遭い、そのうちの約300艘が「北国立大船」であったことが報告されている。つまり、大坂両川口に停泊していた廻船のうち、少なくとも5分1は、北国の船、つまり北前船であったことが分かる<sup>(6)</sup>。

さて、屏風の廻船を再び観察してみよう。屏風に描かれている安治川口の廻船の中で、こちらに船尾を向け、船体構造が比較的分かりやすい廻船があるので、この廻船にフォーカスしながら、その特徴についてみていきたい。

この廻船には、弁才船を象徴する大きな「舵」（17世紀～19世紀にかけて次第に大きくなった）、船尾最後部の両側にあつて「寄掛り」と「外艫」との後端を固める板である「塵<sup>ちり</sup>」の部分、両側の「塵」をその上部で連結させる梁である「結び」の部分、船の床船梁の中央上面に二本並べ立て、艫屋倉最後部の梁にその中間を組み合わせる柱としての「艫車立<sup>ともしやたつ</sup>」（屋倉上面より高く突き出し、その上端に胴木を渡して帆柱を切り倒したときの受けとする。また、舵を取り付けた際、その身木を二本の間に入れ、「前掛」という綱具をもって留めるのに役立つ。）、船の「垣立<sup>かきだつ</sup>」等がはっきりと描かれている<sup>(7)</sup>。ただ、これが大型の弁才船であるとするならば、反帆数が少ないのが気にかかるが、それほど厳密には描いていないのであろうか。

フランツィスカ・エームケ氏の講演によると、この屏風には、『撰津名所図会』に描かれている図柄と同じような絵がいくつか配されているらしい。この見解を手がかりにして、『撰津名所図会』の「安治川口諸国入津」および「安治川橋」それぞれに描かれた廻船と、この屏風に描かれた廻船を比べてみよう。

まず、『撰津名所図会』の「安治川口諸国入津」の場面では、船尾の部分に「福壽丸」と船名を掲げた弁才船が、後ろ向きに大きく描かれている。よく見ると、前述した屏風のなかの廻船の特徴（「舵」「塵」「艫車立」「垣立」等のデザイン）とよく似ている。

次に、『撰津名所図会』の「安治川橋」の場面をみてみたい。「安治川橋」の絵には、安治川橋付近に停泊している弁才船の船首である水押の先端に、「下り」と呼ばれる黒色の飾りが付けられている<sup>(8)</sup>。この「下り」の形は廻船によって様々であったが、ここに描かれている「下り」の形が、屏風の廻船に付けられている「下り」の形と同じなのである。

さらによく見ると、屏風に描かれたその他の弁才船の「下り」が、すべて同じ形（『撰津名所図会』に描かれたものと同じ）であることや、「垣立」部分のデザインも同じであることなどから推測すると、屏風の他の部分と同様に、屏風製作者は『撰津名所図会』を参考にして、安治川口の場面を描いた可能性が高い。

さらに、屏風右下（第一扇・第二扇）から中央下部（第三扇・第四扇）へ視線を移すと、安治川口の廻船から積み替えられたと思われる米俵などの荷物を、上荷船や茶船が、大坂市中へ向けて運んでいる様子が描かれ、安治川口～大坂市中へと、場面の変化を表現している。荷物に米俵が多いのは、大坂らしい特徴であろう。さきほどの『撰津名所図会』には、川口付近では、酒・肴・麩類・野菜などを小船で売る商売もあったこと、遊女が乗って三弦を弾いている船（伽遣船）もあったことなどが記されているので、これらの小船も大船の周りに多く控えていたのであろう。屏風では、この部分に、三艘ほどの屋形船が描かれている。なかには、屋形船の中から、母親とその子供らしい人物が顔を見せているものもみられ、忙しそうな周囲の上荷船の船頭たちとは対照的に、ゆるやかな時の流れを印象付ける効果を与えている。

## ②右隻左下部（第五扇）の船 — 雑喉場魚市場周辺の船 —

次に、右隻左下部（第五扇）の船々についてみていきたい。この場面には、安治川から入津した多くの船々を管理する船番所と思われる建物がみられる。その船番所の近くには、西日本各地から運ばれた生魚が商われた雑喉場魚市場がみえる。近世初期の大坂における生魚商いについては、大坂の陣後の元和4年（1618）、それまで靱町・天満町で営業していた魚商人のうち、十七軒が上魚屋町（中央区安土町一丁目・備後町一丁目）に移転し、生魚市場としての特権を得ていた。ところが、大坂三郷域の拡大に伴い、魚船の接岸地が市場から遠くなり、安治川から上魚屋町に魚を運搬する途中で魚が腐ることが多くなったため、これらの商人たちは、鷺島に出張所を設けて売買するようになった。さらに、安治川右岸の野田村・福島村などの漁民たちも、漁獲した雑魚類を鷺島で販売するようになったため、延宝年間（1673 - 81）には、鷺島は「雑魚場」「雑喉場」と呼ばれるようになった。それ以降、上魚屋町の魚商人たちが雑喉場に本店を移転したこともあって、市中の生魚の取引は雑喉場が中心となり、西日本各地からの生魚を商うようになった<sup>(9)</sup>。

さて、雑喉場周辺に多く描かれている船々をみると、比較的小型の船が多いのが特徴である。上荷船・茶船のほか、雑喉場特有の船「活魚船」があるように思われる。

雑喉場魚市場と関係のある船については、表1-②にも取り上げているように、近世前期に

降、朝廷御用の生魚を、淀川を遡って京に運搬した「今井船」がある。「今井船」は、左隻に多く描かれた淀川三十石船（後述）よりも小型で船足が速く、さらに、天皇家の御用ということで、運航、係留、荷揚げには優先権が与えられていたという。後には、雑喉場から生魚を、朝から塩魚干魚も積登せるようになったらしい<sup>(10)</sup>。

さらに、表2にあるように、その他雑喉場に入る船として、「尼ヶ崎船」「兵庫船」「明石船」などの渡海船のほか、「諸国魚船」がある。「諸国魚船」は、大坂および瀬戸内海地域の船で、多くは前述の活魚船のことではないかと考えられる。活魚船とは、産地から白身の漁種を活間という魚艙に泳がせながら積み込んで、大坂まで運ぶ船のことである。活魚船では、尻無川・安治川下流の沖三・四里付近で、船の活間の通水口の穴に木詮を内部から詰めて、川水が入らないようにして、一尾ずつ<sup>しめ</sup>めていく。このようにしながら、尻無川や安治川を遡上して、雑喉場生魚問屋の納屋裏まで運ぶ。また、冬季には、水温が低下するため、活間に泳がせながら魚を運べないので、出荷する前に生魚を<sup>しめうお</sup>めて、「メ魚」にして運んだ。この場合は、「活魚船」ではなく、「生魚船」と名称が変わった<sup>(11)</sup>。また、当時の活魚船は、船首の形によってその船の所属地が決まっていたようである。

近世後期には、兵庫・尼崎・堺などから雑喉場を通さずに、生魚を売り捌く者が増加したり、また、淀川の三十石船問屋が生魚を問屋同様に引き受け、他方に販売したりしたことが大きな問題となり、雑喉場の生魚市場としての地位が危ぶまれるようになった<sup>(12)</sup>。

あらためて屏風をみると、尻無川・安治川を遡上してきた活魚船と思われる船が、百間堀川に面した生魚問屋の納屋裏に横付けし、生魚が納屋に運ばれる様子が描かれている。ここで、生魚を納屋に運び込んでいるのは、魚問屋の仲仕・丁稚・手代たちであろうか。なかには禪一つの姿で仕事をしている男性も見える。魚は、ほとんど赤い色と青い色で描かれ、赤い色は、瀬戸内海でとれた鯛を連想させる。さらにその西側は、納屋の表側で、一人の男性が頭上に鯛を掲げてセリにかけている様子が描かれている（納屋の一階が問屋の店舗）。屏風に描かれた「雑喉場魚市場」の場面は、雑喉場を描いたその他多くの絵画の中にも見られるもので、『摂津名所図会』の「雑喉場の魚市」の箇所にも、活魚船から納屋に生魚が運ばれている納屋裏の場面と、表での賑々しいセリの様子場面がそれぞれ描かれている<sup>(13)</sup>。

雑喉場で取引された生魚は、生魚仲買人（天和3年（1683）より誕生）の手を経て、料理屋の調理人、仕出屋、生魚振売商人、小売人たちに売り渡され、大坂三郷を中心とした人々の生魚需要に応え、大坂食文化の発展に大きく寄与した。

### ③左隻左部分（第四扇・第五扇・第六扇）—大川の船々—

屏風左隻左部分（第四扇・第五扇・第六扇）には、大川にかかる天満橋、天神橋、難波橋と、これらの橋の下にひしめき合うようにして描かれた多くの船々がみられる。屏風中央部（第四扇）には、東横堀川が流れ、大川に合流する地点には、葭屋橋・今橋・高麗橋がかかり、両側の町をつないでいる。

大川に描かれた船々は、「上荷船」・「茶船」・「淀川三十石船」・「屋形船」などのほか、大名の「川御座船」らしきものも見られる（これらの船の詳細については表1-②を参照）。また、屏風では運んでいる荷物がはっきりと断定できないが、その他には、砂船（川の土砂を採取して売ることを渡世とした）や、土船（山土を積み、売ることを渡世とした）なども、大坂の川船として活躍をしていたので、その可能性もあるだろう<sup>(14)</sup>。

この場面に描かれている小船は、ほとんどが加子一人で、米俵や桶などの荷物を、大坂三郷



の間屋に運送している。このような上荷船や茶船は、川口の<sup>みおつくし</sup>湊標より内、市内の河川による荷物運送の特権を持ち、元禄初期頃より、<sup>かせば</sup>杣場という慣行を作っていた。これは、大坂市内諸川の沿岸を二、三町ごとに区切り、働き場を定めて<sup>かせば</sup>杣場とし、20艘～30艘で組み、他の船を入れずに営業を行うもので、しばしば争いも生じていたという。船乗りたちは、積荷が一艘分に達しないときは、積合荷物なしと申し立てて荷物を搭載せず、荷物が多い時には増加子を要求するなどして、荷主を困らせることもあった<sup>(15)</sup>。

次に、大川に多数描かれているのが、遊山客のための貸船であった「屋形船」である。表1-②にも取り上げたように、江戸で屋形船と言え、大型の屋形を設けた大型川船に限られていたが、上方では大小を問わず、すべて「屋形船」と呼んでいた<sup>(16)</sup>。屏風の屋形船は、色とりどりに趣向を凝らしたデザインの幕を張り、緋毛氈を敷いた座敷が備えられている。そこに、着飾った女性が乗り、客を迎えているものが多い。その他、船上に寝転がってくつろいでいる男性や、商談をしているような人々もいる。屏風のうち、難波橋下の屋形船では、網を投げて魚を獲っている男性がみえる。その場で獲れた魚をさばくのであろうか。当時、北浜周辺には、料理屋の屋形船もあり、大川をたゆたいながら浪花名物に舌づつみを打つ旅人も多かったため、これは、料理屋の船であろうか<sup>(17)</sup>。

ここに描かれた屋形船には、二階を持つ豪華なものもあり、富裕な町人たちが、商談や取引先の接待に使用していたのであろう。近世後期、江戸と京・大坂の風俗を比較して書かれた『守貞謾稿』には、屋形船の説明の箇所に「川遊びの船なり。大坂のは二階あり。」と記され、二階があるのは大坂の屋形船の特徴であったようである。また、茶船についても、「これも川遊びの小楼船なり。無二階なり。屋根なきもあり。諸物川運漕に用ふ。(新造茶船賃、銀一貫目ばかり。)」とあり、茶船が荷物運送のほか、川遊びのための船(ただし一階のみ)でもあったことが分かる。さらに、『守貞謾稿』には、「船宿・船数ともに江戸のごとく多からず。」と記され、大坂よりも江戸の船数の方が多かったことを伝えている<sup>(18)</sup>。

このような屋形船は、大坂川内、川口、住吉、堺、尼崎にて営業を行い、伏見や淀へ行くときは、過書船仲間に上米銀を出していた。屏風右隻(第三扇)の住吉大社高灯籠のある出見浜にも、緋毛氈を敷いた屋形船が描かれ、大坂市中や住吉などで、舟遊びをしながら浪花の名所見物を行うことが流行していたことを物語っている<sup>(19)</sup>。

また、屏風中央(第四扇)の東横堀川と大川の合流地点に、大川に突き出た立派な家屋がみえる。ここは、「蟹島新地」という遊所であった<sup>(20)</sup>。この遊所から、三大橋とその下を行き交う数多の舟々を眺め、美味しい料理を堪能することは、大坂の人々の贅沢なひと時だったのであろう。また、船着場の近くであったため、大坂を訪れた旅人たちも、ここで楽しんだのであろう。「増修改正撰州大坂図 全」(天明9年(1789)刊)には、地図上のこの場所に、「天明三年癸卯築地」と記され、天明3年(1783)に新たに開発された場所であったことを示している<sup>(21)</sup>。

続けて、第五扇の天満橋南詰の東、八軒屋周辺をみてみよう。ここには、伏見から大川を下ってきた三十石船がみえる。屏風には、着船した三十石船から人々が荷物を持って上陸している様子が描かれている。天満橋・天神橋周辺にも何艘か三十石船が描かれているが、着岸の順番を待っているのではあろうか。さらに大川を遡り、京橋の北に目をやると、ここにも、三十石船らしき船がみえる。京橋北の網島付近の大川で、大きく両手を挙げている男性を乗せた三十石船は、『撰津名所図会』「網嶋」に描かれた三十石船とほぼ同じである<sup>(22)</sup>。この場面もまた、『撰津名所図会』からの引用であろうか。

表1-②にも、やや詳細に記したが、三十石船の本来の呼称は過書船である。過書座支配の

船のうち、三十石積以上のものを過書船と呼び、二十石積のものを淀二十石船、淀上荷船と呼んで区別していた。近世末期には、過書船は、130石積を限度とするようになり、三十石船は、過書船の中でも最少クラスの船となった。天保10年(1839)の『大川便覧』によると、三十石船は、当時171艘もあり、京大坂間の交通手段として欠かせないものとなっていた<sup>(23)</sup>。また、『改正日本航路細見記』(天保13年)の中の「航路名所記」には、三十石船の運賃について、伏見から大坂まで、「かり切り一艘」で、上りが62匁、下りが3貫文くらい、「のりあひ一人前」で、上りが180文、下りが84文と、それぞれ記載されている<sup>(24)</sup>。大坂八軒屋から伏見に上るためには、人力による曳き船を必要とし、所要時間も長かったため(上りで一日・一晩、下りで半日・半夜)、伏見行の上り運賃の方が当然割高になっている。

最後に、大川に浮かぶ数多の船々の中で、ひときわ異彩を放っているのが、天神橋と難波橋の間にみえる二艘の「川御座船」である。川御座船は、大名が、国元や大坂の河川で使用する喫水の浅い船のことである。とくに大坂には、幕府をはじめ、西日本の諸大名の川御座船が置かれ、参勤交代時や、朝鮮使節および琉球使節の来朝の際に、迎接用として、淀川の航行に利用された<sup>(25)</sup>。屏風の川御座船は、朱と黒を基調とし、華麗な模様で彩られた外観に、二階建ての屋形がみられ、一見して他の船々とは区別できる。船の中には、袴を着た武士らしき人物がおり、船尾部分にも羽織袴を身に付けた数人の武士が見える。公務中なのであろうか。また、これら二艘の川御座船の向こうにも、作りは簡素であるが、武士が乗船している二艘の川船がみえる。これらは、「供船」か、もしくは「使者御座船」であろうと思われる。使者御座船は、大坂では、大名家の使者が乗る船で、御屋敷方や留守居衆が出勤する時に使用され、「御城通舟」「城通」などと呼ばれていた<sup>(26)</sup>。

表1-②にも取り上げたが、川御座船の屋根について、天皇家御用のものは、で千木・<sup>ちき</sup>鯉木<sup>かつおき</sup>があり、将軍家御用のものは、檜皮葺で<sup>しやちほこ</sup>鯨<sup>しやちほこ</sup>があり、その他の大名家は、すべて、とち葺で箱棟鬼板を備えていたという<sup>(27)</sup>。

表1-① 19世紀前期～中期頃 大坂に入津していた主な廻船

船の種類	名称	特徴
海上の廻船	菱垣廻船	大坂—江戸間運航(江戸時代前期には、年間約4往復。近世後期には年間約8往復)。元禄7年(1694)以降、荷主の権利を守るため、江戸で十組問屋が、大坂で二十四組問屋が成立し、この荷主の管理の下、大坂の菱垣廻船問屋が主要な積荷を江戸まで運んだ。近世前期は250積、元禄期には500石積が主力であったが、18世紀以降大型化し、1000石以上のものが多くなった。廻船の舷側の垣立の下部を菱組の格子で装飾した廻船。主な積荷は、木綿・畳表・蕙・蠟燭・油・紙・銅・鉄・塗物・小間物など船の上積荷物が中心。天保12年(1841)株仲間解散令により、廻船の「鱸垣立」の部分にあった菱垣のトレードマークは廃止された。
	樽廻船	大坂—江戸間運航。享保15年(1730)成立。積荷は、伊丹・池田・伝法・西宮・魚崎・御影・脇浜・神戸・今津などの酒造業者の上方酒。同じ弁才船である菱垣廻船とは、船としての積載能力や速力に相違はないとされる。菱垣廻船と同様、近世後期にかけて大型化した(天保15年(1844)の灘・兵庫の樽廻船は、ほとんどが1400石積前後の大船)。18世紀末以降、酒樽の積込効率のよい専用船化を意図し、船体を深めに作るようになった。19世紀以降、菱垣廻船荷物の洩積が増加し、江戸入津数も、菱垣廻船の倍以上となった。
	諸国の廻船	大坂に入津した主に西国諸藩に船籍をもつ廻船。御城米船やその他藩の国産品を大坂へ移出するため、多くは、商人所有の廻船が使用された。

海上の廻船	北前船	主に北陸地域に船籍をもち、北海道～瀬戸内～大坂を商圏とした廻船。弁才船が全国的に普及した18世紀中期頃から、日本海地域の風土的条件に合わせた特徴をもつ弁才船（「北前型弁才船」と呼ばれることもある）が作られるようになった。天保初年頃（1830年頃）以降は、さらに船首尾の反りを大きくしたことから、一見して北前船であると識別できるようになった。冬季に大坂で船囲いをし、春になると日本海へ向けて出帆した。
	塩廻船	大坂には、播州赤穂の塩（真塩）を始め、瀬戸内各地の塩が運ばれた。塩廻船は、200石～1000石程度のものまで、様々であった。

注) 住田正一編解題『和漢船用集』（巖松堂書店、1944年）／横倉辰次『江戸時代 船と航路の歴史』（雄山閣出版、1971年）／『新修 大阪市史 第3巻』、1989年）、石井謙治『和船Ⅰものと人間の文化史76-I』・同『和船Ⅱものと人間の文化史76-II』（法政大学出版局、1995年）／『赤穂市立歴史博物館 常設展示案内』（図録）、赤穂市立歴史博物館、1999年／『大坂「食」文化専門誌 浮瀬No.3 特集「雑喉場」』（浪速魚業を守る会、2003年）／酒井亮介『雑喉場魚市場史 大阪の生魚流通』（成山堂、2008年）／「大坂湊口新田細見図」（天保十年）（『近世刊行大坂図集成』創元社、2015年）参照。

表1-② 大坂の主な川船

川船	三十石船	本来の呼称は過書船。豊臣秀吉・徳川家康の朱印状を受けて成立し、伏見一大坂間の淀川を上下した。過書座支配の船のうち、三十石積以上の船を過書船と呼び、二十石の船は、淀二十石船・淀上荷船とよばれて区別された。過書船中でも最少クラスの船が、三十石船で、伏見と大坂の八軒屋間を上下して旅客を輸送した。一艘の乗客は、古くは31人、後には28人で、これを水主4人で運航させた。天保10年（1839）には、171艘もあったとされている。所要時間は、流れをさかのぼる上りで一日または一晩、下り船は半日または半夜。京・大坂の大都市間を低運賃で結ぶ庶民の足として大いに使用された。
	上荷船	大坂川口の滯標の内、市内の河川による貨物の回送の特権を持った小船。七村上荷・中船上荷・新舟上荷・堀江上荷といい、種類がある。堀江舟には、三十石積がある。舟は深く、海でも川でも乗ることができる。川口より本船の上荷を取ることからこの名がある。また、問屋から荷物を本船に積む時にもこの船を用いる。長さ30尺8寸（9.3メートル）、梁6尺（1.82メートル）。二十石積で、加子が二人である。
	茶船	上荷船と同様、大坂市内の河川による荷物回送の特権を持った小船。屋形茶舟もある。もともと茶を煮て売っていた船なので、このようにいう。遊山舟もこのように呼ばれる。その作りは、海舟の作りにして、浅川を行く瀬越舟とする。上荷とは作りが別である。長さ26尺5寸（7.95メートル）、梁5尺6寸（1.7メートル）、十石積で加子一人が乗り込んでいた。
	伝馬船	航海中は、本船に搭載され、大坂に入津した際、陸岸との連絡や荷物の運搬に使用した小船で「橋船」「舢舨」ともいう。千石積の伝馬船は、4～8丁の櫓を装備し、帆走用として5～6反程度の帆をもっていた。
	渡船	大坂の古地図類には、水路の間に「ワタシ」と記され、渡し船が大川やその他の川沿いに多かったことが分かる。
	今井船	朝廷御用の生魚を淀川で運搬していた早働きの船。尼崎の今井道伴の創始とされる。淀川水運を独占した過書船や伏見船（宝永7年（1710）廃止）の支配下にあり、三十石船より小型で船足がはやい。強壯な船手に艀をこがせ、運航や係留、荷揚げには常に優先権が与えられていた。のちに、雑喉場から生魚、朝からは塩魚干魚も積登せていた。

川船	町御座船	本名は、町屋形船。賃を取って借すために、借御座船という。遊山船のこと。酒を携えて妓女を乗せる。大坂川内・川口・住吉・堺・尼崎まで営業し、伏見・淀まで行くときは、過書船仲間に上米銀を出した。船の大きさは、加子二人乗り、三人乗り、四人乗り、五人乗り、六人乗りの五種類があった。風があるときは、用いるのが難しい。町屋形船のうち、最も小さいものを句這という。江戸で「屋形船」と言えば、大型の屋形を設けた大型川船に限られていたが、上方では大小を問わず、一様に「屋形船」と呼んでいた。
	川御座船	幕府、大名の御召船。水押に龍を描いたもの、雲水奇花を飾ったもの、舳に蟠龍飛龍を刻んだものもある。屋形の作りには数種ある。すべて中倉を屋形とする。これを上段といい、その後を次の間といい、その後倉を舳屋簾という。惣矢倉であった。天皇の川御座船の屋根は、茅萱葺で、千木・鰹木があり、将軍家のものには、檜皮葺で、しゃちほこがあった。その他はすべてとち葺にて箱棟鬼板があった。唐破風てり破風、むくり破風、入母屋作り、横棟造、上屋形があった。

注) 表1-①に同じ。

表2 『改正日本航路細見記』(天保13年)にみる諸国廻船の大坂着場所

諸国の船	大坂内着所		
尼ヶ崎船	湊橋さこばへん	筑後船	北はま ちくぜん橋へん
兵庫船	大川町ざこば	小倉 并 下関船	筑前はしにし
播州筋万津船	淀屋ばしにし	肥後船	越中ばし左右
明石船	大川町ざこば	薩摩船 日向船	勘助じま
備前岡山船	安治川新ぼり	北国船 北前船	難波ばし
備中玉嶋船	びくに橋越中橋へん	尾張船	寺じま
備後鞆船 并 福山尾道船	せんだんの本橋より西へ 又 安治川新ぼり	泉州船	どうとんぼり
阿波船	水分はし左右 又だうとんぼり	諸国塩船	九条じま
淡路船	右同断 又だうとんぼりふかり	諸国魚船	ざこば
讃岐高松船	北浜大川町 又安治川貳丁目	江戸廻船 并 菱垣船樽船	安治川のしも
同丸亀船	立売ぼりばしにし	北廻廻船	まへだれしまへん
伊予大洲船 并 宇和嶋船	肥後はし左右	金毘羅参詣船	淀屋ばし 長ぼり どうとんぼり
同松山船	淀屋はし左右	上荷船 并 茶船	淀屋ばし 肥後ばし 并 ばくらう辺所々川々
土佐船	長ぼり西ばくらう	新三十石船	両よこぼり 并 所々にあり
安芸廣嶋船	越中ばしへん	貸御座船	川々所々にあり

注) 「改正 日本航路細見記」(天保13年(1842)・須原屋茂兵衛板)『日本地圖選集 江戸明治所處湊港・船舶繪圖集：並改正日本航路細見記』人文社、1972年より作成。

注

- (1) 「二つの屏風が語る大阪～「豊臣期大坂図屏風」と「浪花名所図屏風」」(平成 27 年(2015) 11 月 9 日 於大阪市中央公会堂)における同氏の講演。
- (2) 『日本地圖選集 江戸明治所處湊港・舟船繪圖集：並改正日本航路細見記』人文社、1972 年
- (3) 石井謙治『ものと人間の文化史 76 - I 和船 I』法政大学出版局、1995 年
- (4) 以下、『撰津名所図会』については、『大阪都市遺産研究叢書別書 5 名所図会でめぐる大阪 - 撰津 I -』関西大学大阪都市遺産研究センター、2014 年を参照。
- (5) 中西聡『海の富豪の資本主義 北前船と日本の産業化』名古屋大学出版会、2009 年
- (6) 「嘉永七寅年より諸国変義聞書」(広島三原商人の記録)、広島県立文書館所蔵
- (7) 船の構造と船体部分の名称および解説については、石井謙治氏前掲書を参照。
- (8) 「下り」については、石井氏前掲書を参照。
- (9) 『新修大阪市史』第 3 巻 P453 ~ 456
- (10) 『大坂「食」文化専門誌 浮瀬No.3 特集「雑喉場」』浪速魚菜を守る会、2003 年
- (11) 『大坂「食」文化専門誌 浮瀬No.3 特集「雑喉場」』(浪速魚菜を守る会、2003 年)、酒井亮介『雑喉場魚市場史 大阪の生魚流通』(成山堂、2008 年)
- (12) 拙稿「商家の葬礼と人間関係 - 大坂雑喉場の魚問屋・神崎屋平九郎家の人脈形成」藪田貫・宇佐美英機編『<江戸>の人と身分 1 都市の身分願望』吉川弘文館、2010 年
- (13) 前掲『大阪都市遺産研究叢書別書 5 名所図会でめぐる大阪 - 撰津 I -』参照。
- (14) 『新修大阪市史』第 3 巻 p 435 ~ 436
- (15) 『新修大阪市史』第 3 巻 p 432 ~ 435
- (16) 石井謙治『ものと人間の文化史 76 - II 和船 II』法政大学出版局、1995 年
- (17) 大坂大川沿いの料理屋の主人が記した「年中取組献立」(東京大学附属図書館所蔵)には、一年間の料理献立と、それを所望した客人について、詳細に記録されている。
- (18) 喜田川守貞著、宇佐美英機校訂『近世風俗志 (一) (守貞謄稿)』岩波文庫、1996 年
- (19) 『撰津名所図会』所収「出見濱高燈籠」にも、遊興のための屋形船が三艘ほど描かれている。前掲『大阪都市遺産研究叢書別書 5 名所図会でめぐる大阪 - 撰津 I -』参照。
- (20) 『浪花百景』所収「今橋つきぢの風景」、立風書房、1976 年
- (21) 『近世刊行大坂図集成』創元社、2015 年
- (22) 前掲『大阪都市遺産研究叢書別書 5 名所図会でめぐる大阪 - 撰津 I -』参照。
- (23) 石井謙治前掲書『和船 II』参照。
- (24) 『改正日本航路細見記』(『日本地圖選集 江戸明治所處湊港・舟船繪圖集：並改正日本航路細見記』人文社、1972 年)
- (25) 『国史大辞典』参照。
- (26) 住田正一編解題『和漢船用集』巖松堂書店、1944 年
- (27) 前掲『和漢船用集』参照。

## 孤例の屏風「浪速名所図屏風」

長谷 洋一

浪速名所図屏風（六曲一双）は、画面全体を厚塗りの金雲で横長に区切り、百カ所以上の大坂の景物、名所を描いた屏風である。通常の名所図屏風のように画面を右から左（大坂図屏風では南から北）へ大坂の景観をパノラマ的に描いたものではない。

例えば右隻2扇上段には住吉神社（住吉区）が描かれ、同下段には旧妙徳寺（福島区）が描かれており、これまでの大坂図屏風ではありえない配置となっている。

各隻の画面は大きく上段、中段、下段に分かれている。左右隻を並べて概観すると、右隻上段から住吉、今宮蛭子宮、四天王寺、大坂城、桜宮へと左隻に至り、中段では、左隻から右隻に向かって天満天神から四ツ橋、道頓堀、阿弥陀池から安治川に至る。再び右隻下段からは安治川口から野田、福島、雑喉場、長堀へと至っている。一双の屏風全体を扁平なS字状構図で大坂の景物、名所を描いているのである。こうした構図を採用する大坂図屏風はなく、「浪速名所図屏風」はいわば孤例の屏風といえよう。

描かれた名所も大坂名所の定番である住吉神社、四天王寺などよりも料亭「浮瀬」や「雑喉場」といった新しい名所が多数描かれている。既に指摘されるように古くからの名所に加えて、新名所が誕生した契機は『都名所図会』を嚆矢とする名所図会の出版が大きく影響していると考えられている。それまでの名所案内記の挿絵や摺物が極めて単純で稚拙な描写に留まっていたのに対して、秋里籬島『都名所図会』以降の名所図会は実際の踏査による細かな名所も取り上げ、挿絵もまた俯瞰的構図に基づいた精緻なものに変化している。この変化は新名所を誕生させ、また名所図屏風においても大きな変化を与えた。黒田氏の論考にもあるように「浪速名所図屏風」の描写もまた『撰津名所図会』などに依拠するところが大きい。

しかし「了徳院」や「大坂城」など『撰津名所図会』に掲載されていない名所も多数描かれており、制作者は『撰津名所図会』を下敷きにしながらも当時の大坂を実際に取材し状況の変化に合わせて適宜加筆を行い、現実味のある大坂の描写をめざした意図をそこに認めることができると思われる。

新名所を含めた大坂への関心は、描写対象からもうかがわれる。大坂に点在する寺社仏閣や橋を詳細に描き、さらに安治川に停泊する廻船や家屋、蔵屋敷などくどいまで密集して描き込むことで大坂の繁栄を表現しようとしたものと考えられる。いっぽう人物描写は墨線で体型の輪郭をあらわし金泥線での重ね描きなどを行って着衣を表わしているが、目鼻立ちはなく総じて稚拙な表現にとどまっている。しかし花見や風揚げ、労働など人びとの動きを読みとることができ、そこに活気さえ感じられる。群立する建物群や河川を行き交う船舶、人々の活気ある動き、こうした要素が屏風に凝縮されて、結果的に大坂の繁栄を示したものと考えられるのである。

新旧の名所が多数描かれるいっぽうで、四天王寺の石鳥居（西門）や住吉神社神宮寺など描かれなかった周知の名所も存在する。描かれなかった名所は描かれた名所以上に「浪速名所図屏風」の景観年代と製作時期とを考える上で重要なポイントとなってくる。

「浪速名所図屏風」を考察するうえで参考となるのが、大阪歴史博物館蔵「大坂風景風俗図襖」である。4面の襖に住吉社から大坂城までの高津社、津村別院（北御堂）難波御堂（南御堂）、料亭浮瀬が描かれており、製作時期は幕末とされている。この襖絵では金砂子の霞が大きく画

面を区切り、その余白部分に名所を小さく描いており、霞から見え隠れする名所が浮かび余情豊かなイメージの世界を生みだしている。「浪速名所図屏風」も金雲と金霞によって画面が区切られているが、名所と名所の距離を短縮する以外の効果はなく、しかも道頓堀芝居小屋の梵天が金雲の上に描かれたり、群青彩の遠山まで金砂子を播くなど、筆致の稚拙さは、当時の画壇のレベルとはかなりの隔たりが認められ、本屏風製作に関わる環境もまたある程度限定されるものと想像するのである。

こうした稚拙な表現が伴うにも関わらず、大坂市中を舐めるがごとく描き込まれた多数の新旧の名所は、我々を惹きつけてやまない。比定が困難な名所も存在するが、屏風製作後ほどなくして鉄橋や赤煉瓦の建物に変わりつつある大坂の姿を知る我々にとって「浪速名所図屏風」は近世大坂の最後の光芒を留める稀有な屏風といえよう。

# 「浪花名所図屏風」発見の意味

大阪くらしの今昔館 谷 直樹

## 1. 大坂を描いた屏風の構図

中世末から近世にかけての京の町を描いた屏風絵は、「洛中洛外図屏風」と呼ばれ、100点以上が知られています。洛中洛外図の構図は、ほとんどが京の町を東西に2分し、左隻に西山、右隻に東山を背景にした洛中の町並みを描いたものです。左右に屏風を立ててその中に座ると、居ながらにして京都を眺望できるという趣向になっています。

一方、大坂を描いた屏風絵は11点、襖絵は1点が知られるに過ぎません（表1）。このうち、豊臣時代の大坂城を描いた屏風絵は、「大坂城図屏風」（大阪城天守閣蔵）、「豊臣期大坂図屏風」（エッゲンベルグ城蔵）、「京・大坂図屏風」（大阪歴史博物館蔵）、「大坂冬の陣図屏風」（東京国立博物館蔵）、「大坂夏の陣図屏風」（大阪城天守閣蔵）の5点で、「豊臣期大坂図屏風」を除く4点は、いずれも大坂城を西から眺望する構図になっています。さらに江戸時代の大坂を描いた屏風絵のうち、景観年代が17世紀前期とされる「大坂市街図屏風」（大阪城天守閣蔵）も、西から大坂城と市街地を描いており、豊臣時代の構図を引き継いでいます。また、18世紀初頭の景観年代をもつ「京・大坂図屏風」（サントリー美術館蔵）は大坂の市街を上空から見下ろした描写で、他の屏風絵と趣を異にしますが、西からを眺望した構図になっています。

表1 大坂を描いた屏風絵・襖絵一覧

大坂図屏風・襖	景観年代	大坂城	形状	屏風左隻	屏風右隻	眺望の方向	所蔵
大坂城図屏風	慶長初期	豊臣大坂城	二曲一隻	大坂城天守と四天王寺		西から東	大阪城天守閣蔵
豊臣期大坂図屏風	慶長期	豊臣大坂城	八曲一隻	左に大坂城、右に大坂城下		北から南	エッゲンベルグ城蔵
京・大坂図屏風	慶長末期	豊臣大坂城	六曲一双	京方広寺大仏殿、豊国廟	左に大坂城、右上に四天王寺と住吉大社	西から東	大阪歴史博物館蔵
大坂冬の陣図屏風	慶長19年	豊臣大坂城	六曲一双	大坂城天守	四天王寺	西から東	東京国立博物館蔵
大坂夏の陣図屏風	慶長20年	豊臣大坂城	六曲一双	大坂城の北	大坂城の南	西から東	大阪城天守閣蔵
大坂市街図屏風	17世紀前期	徳川大坂城	六曲一隻	左に大川、中央に大坂城、下に船場（左端の一扇は四天王寺か？）		西から東	大阪城天守閣蔵
大坂市街・淀川堤図屏風	17世紀前期	徳川大坂城	八曲一双	画面下に淀川、左に八幡から枚方宿、右下に天満	左に大坂城、下に大川、右に城下町、上に四天王寺から住吉大社	西から東	大阪城天守閣蔵
浪花名所図屏風	元禄頃	徳川大坂城	八曲一双	左に大坂城、下に大川、右に船場	左に道頓堀、中央に四天王寺、右に住吉	北から南	湯木美術館蔵
大坂市中及近郊図小屏風	元禄時代	徳川大坂城	六曲一隻	左に大坂城、中央に四天王寺、右に住吉大社		西から東	『古典籍展示即売会目録』（中尾松泉堂）
京・大坂図屏風	18世紀初頭	徳川大坂城	六曲一双	京名所	左に伏見、淀城、淀川、中央に大川、船場、上に大坂城、右に四天王寺、住吉大社、堺	西から東	サントリー美術館蔵
浪花名所図屏風（新出）		徳川大坂城	六曲一双	天満、大川から大坂城、四天王寺	住吉、堺	西から東	個人蔵
大坂風景風俗図襖	幕末	徳川大坂城	襖四枚	左に大坂城、下に大川、中央に道頓堀、右に住吉大社		西から東	大阪歴史博物館蔵



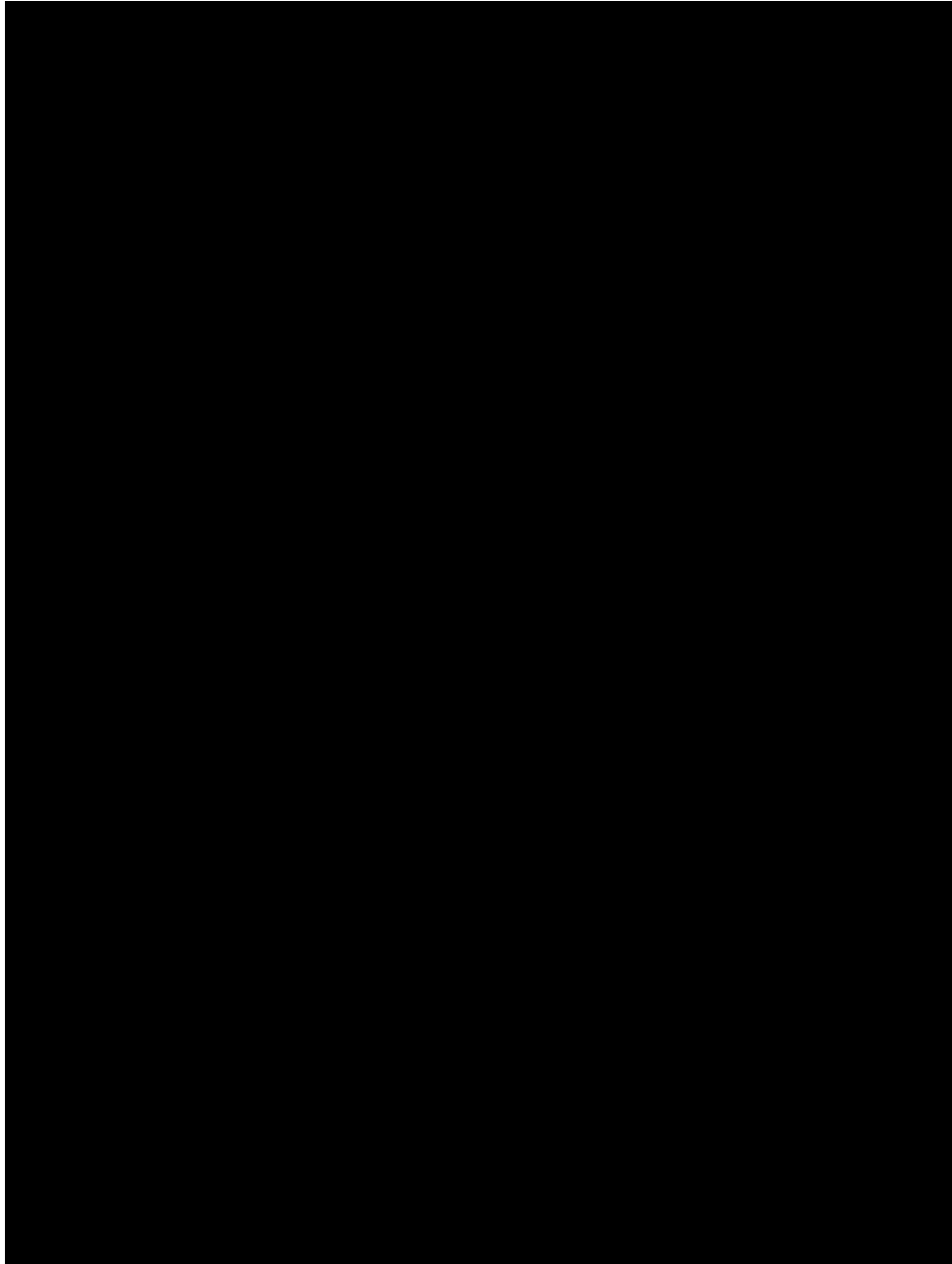


図1 慶長期の大坂城下概念図(内田九州男論文より『まちに住まう一大阪都市住宅史』平凡社、1989年)

こうした大坂を描いた屏風絵の構図は、大坂城と城下町の変遷に関係がありそうです。云うまでもなく、大坂のルーツは豊臣秀吉による大坂築城にあります。秀吉の最初の都市構想は、南北に延びる上町台地の北端に大坂城を築き、南方に細長い町を建設して四天王寺と結び、さらに南にある堺の町を外港とする壮大なものでした(図1)。当時の大坂には、北と南の両端に大坂城天守と四天王寺の塔というランドマークがあり、他を圧倒していました。そこで、画面の左に大坂城、右に四天王寺を配置し、その間に町並みを描いた構図が誕生したのです。豊臣期の大坂を描いた屏風絵は、秀吉の都市構想を反映したものと考えられます。なお、合戦図である「大坂冬の陣図屏風」や「大坂夏の陣図屏風」は、都市を描いた屏風絵とは性格が異なりますが、上町台地が戦場になったこともあり、同時期の屏風絵の構図を用いています。

ところが、秀吉の晩年にあたる文禄5年(1596)、畿内に大地震が発生しました。慶長伏見大地震と呼ばれている地震です。伏見城の天守が倒壊し、堺の町が壊滅して多くの死者を出し

ました。そこで、慶長3年（1598）、三の丸建設と同時に船場を大々的に開発し、西端の川口に港を築いて大坂の玄関口としました。大坂の城下は一気に西側に広がり、都市軸は、南北軸から東西軸に転換したわけです。大坂夏の陣後に大坂を再建した徳川氏は、船場の開発をさらに進め、淀川の北岸にある天満を含めた大坂三郷が完成しました（図2）。加えて、寛文5年（1665）に大坂城天守が焼失したことから、ランドマークとしての大坂城の地位が低下しました。その結果、大坂の繁栄は、川口の港から中之島を経て京に向かう淀川に象徴されるようになりました。こうした都市の発展を反映して、淀川の向こうに大坂城や船場の町を配した構図が新たに現れました。

その典型は、17世紀末の景観年代とされる「浪華名所図屏風」（湯木美術館蔵）です。この屏風の左隻は画面の中央に淀川、その上に船場の市街を描いており、北から南方向を眺める構図になっています。それより古い、17世紀前期の景観年代とされる「大坂市街・淀川堤図屏風」（大阪城天守閣蔵）は、大坂を描いた右隻の右側は西から大坂を見た構図で、四天王寺や住吉大社を配置していますが、左端の大坂城の辺りから微妙に視点を変え、左隻の天満は北から描く場面になっています。なお、近年紹介されて話題になった「豊臣期大坂図屏風」は、秀頼時代の大坂を描いているようですが、実際の制作は17世紀中頃とされています。そこで、制作

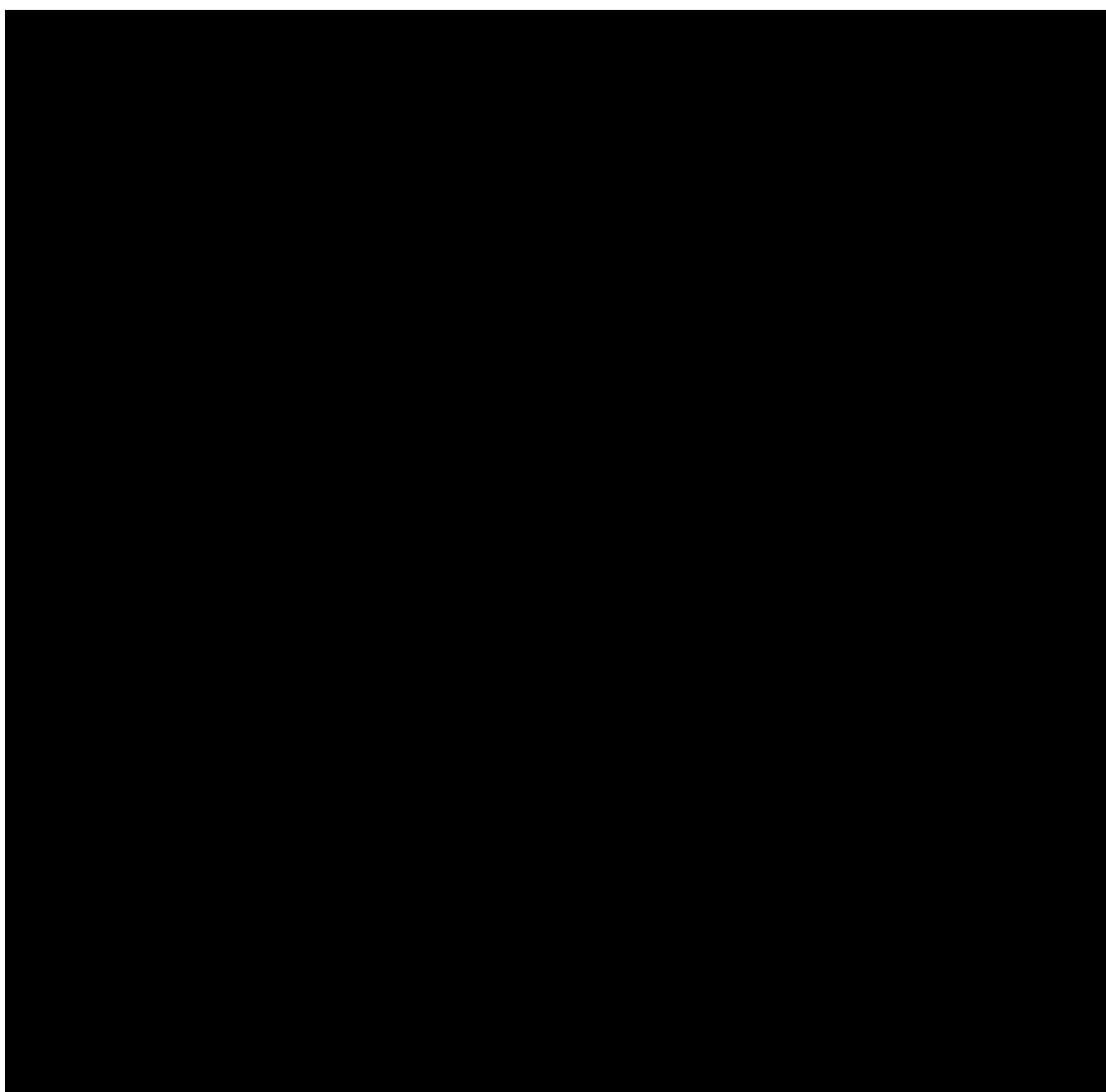


図2 江戸時代初期の大坂三郷（宮本雅明論文より『まちに住まう一大阪都市住宅史』前掲）

当時新しく登場した北から大坂を眺望する構図に、豊臣時代を追慕して復元的に描いたと考えられると、構図の新しさと描かれた建物の古さが説明できるのではないかと思います。

一方、大坂を西から描いた構図は江戸時代を通して制作されました。最近紹介された「大坂市中及近郊図小屏風」は元禄年間の景観年代とされるもので、その構図は右端に大きく住吉大社を配し、その左に四天王寺や寺町を描き、左端上部に小さく大坂城を描いています。さらに19世紀の景観年代をもつ「大坂風景風俗図襖」（大阪歴史博物館蔵）や今回紹介された新出の「浪花名所図屏風」（個人蔵）は、いずれも西から大坂の町を眺望した構図になっています。これは、大坂の市街地、とりわけ船場が大きく発展し、さらに南の道頓堀、四天王寺から住吉大社に至る大坂の南郊に名所地が点在していたことが、その背景にあると考えられます。

屏風絵だけでなく、江戸時代に大坂で版行された地図の類は、大半のものは東が上、西が下に描かれており、当時の人の感覚では、北と南を左右に配置する大坂の地形図が一般的であったことがわかります。また絵画でも天明7年（1787）に円山応挙の手になる「浪花大湊図」は、西の大阪湾上空から大坂市街を見下ろす鳥瞰図として描かれています。同様の構図をもつもので、天保5年（1834）に中川山長が描き、同10年に版行された「浪華新丘図」（関西大学図書館蔵、図3）があります。この図は、大阪湾の上空から大坂と堺の町を俯瞰した壮大な構図になっています。これらの作品は、屏風絵の構図と相互に影響を与え合っただのではないかと思います。

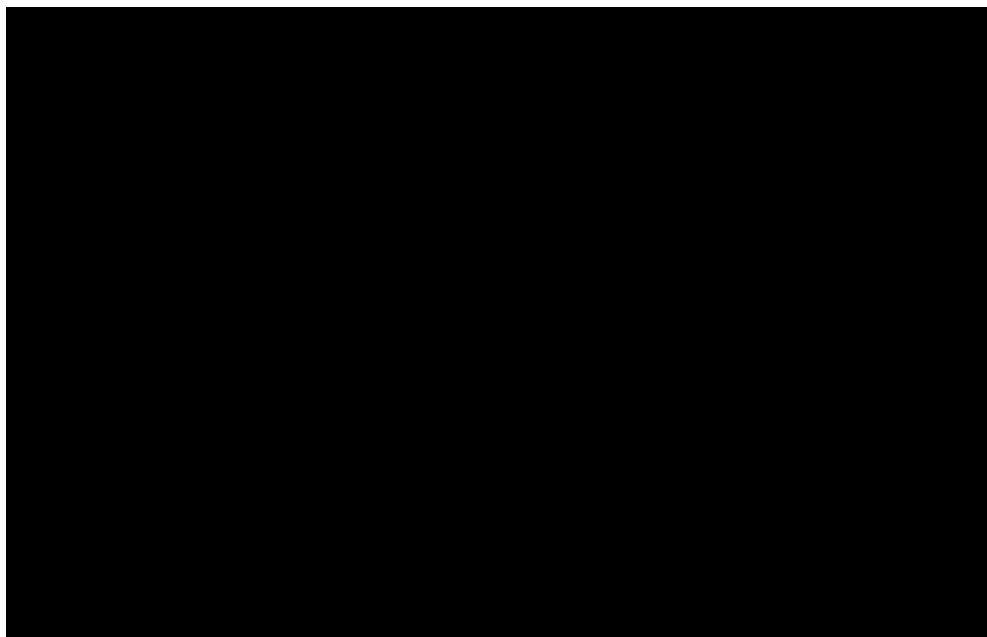


図3 「浪華新丘図」（関西大学図書館蔵）

## 2. 「浪花名所図屏風」詳覧

ここでは「浪花名所図屏風」に描かれた大坂の名所のうち、いくつか特徴的な場面を取り上げ、建築史の観点から検討を加えてみます。

まず、大坂城（左隻4・5層）。当然ながら、大坂城の天守は描かれていません。豊臣時代の天守は大坂夏の陣で焼失しましたが、元和6年（1620）に徳川幕府は大坂城の再建を命じ、寛永3年（1626）に5層の天守が竣工しました。その天守も寛文5年（1665）に落雷で焼失し、その後、江戸時代を通じて再建されることはありませんでした。しかし、徳川氏が再建した大坂城の櫓や門、本丸御殿は幕末まで残っており、本屏風に描かれた大坂城の姿は、それらを反映したものになっています。注目すべきは、本丸とおぼしきあたりに4棟の三層櫓が描かれて

いることです。徳川大坂城の本丸は11棟の三層櫓で囲まれており、幕末の古写真が残されているのでその姿を確認することができます。屏風絵と古写真とを比較すると、屏風絵では千鳥破風に描かれているのに、実際は唐破風であったことなど異なる点もありますが、ここで重要なのは、三層櫓の存在を描いている点です。屏風絵以外も含めた他の絵画資料では、この点をきちんと描き分けたものが少なく、本屏風絵の価値を高めています。

次に四天王寺（左隻1扇）。同寺は、四天王寺式、すなわち南北の軸線上に中門、塔、金堂、講堂を配置し、回廊で囲むという独特の伽藍配置を特徴とします。本屏風は、中門、塔、金堂が描かれていますが、直線上に並んでいません。また、同寺は創建以来、何度も火災に遭っていますが、その都度再建された歴史があります。江戸時代でも、慶長19年（1614）の大坂冬の陣で焼失し、その後、元和年間に江戸幕府の援助で再建されるのですが、享和元年（1801）の落雷で焼失し、文化9年（1812）に再建されています。この時の建物は、金堂の屋根が鍔葺きで、大屋根と庇屋根の間に段差が付けられていました。「四天王寺・住吉大社図屏風」（四天王寺蔵）などは、ここを正確に描いていますが、本屏風では普通の入母屋造の屋根に描かれていて、実際の姿とは異なっています。

住吉大社（右隻4扇）は、摂津国一の宮として定期的に遷宮が行われました。慶長11年（1606）に豊臣秀頼による造営があり、大坂の陣の兵火は免れました。その後、元和4年（1618）、明暦元年（1655）、宝永6年（1709）に遷宮があり、現在の建物は享和2年（1802）の焼失後、文化7年（1810）に造立されたものです。江戸時代の境内景観を見ると、第一本宮から第四本宮までがL字型に配置されていましたが、本屏風ではそこは正確に描かれていません。ただ、本殿の前に拝殿を接合した姿は正しく描かれています。他に、神宮寺の大塔の上層部が見えるのも貴重です。この神宮寺は明治維新の廃仏毀釈で取り壊されますが、大塔は徳島県の切幡寺に移築されて現存（重要文化財）しています。

天満天神社（左隻6扇）は、天保8年（1837）の大塩の乱で焼失し、弘化2年（1845）に再建されました。これが現在の本殿です。これを、本屏風に描かれた本殿と比較すると、屋根の形状が異なっています。すなわち、現状の入母屋造いりもやづくりに対して、本屏風では流造ながれづくりになっています。じつは、本殿の屋根は寛政4年（1792）の焼失以前は流造でしたが、寛政7年から享和元年（1801）にかけて再建された時に入母屋造に変更され、さらに大塩の乱による焼失後に再建された現本殿も入母屋造を踏襲しています（永井規男「大阪天満宮の建築」『大阪天満宮の研究』所収、1991年）。従って、天満天神社の境内景観は寛政4年以前になります。今後、このような作業を積み重ねることで、本屏風の景観年代や制作年代が確定できることを期待します。

町家と町並みの描写は、実景を彷彿させるものがあります。例えば、天満の町並み（左隻5

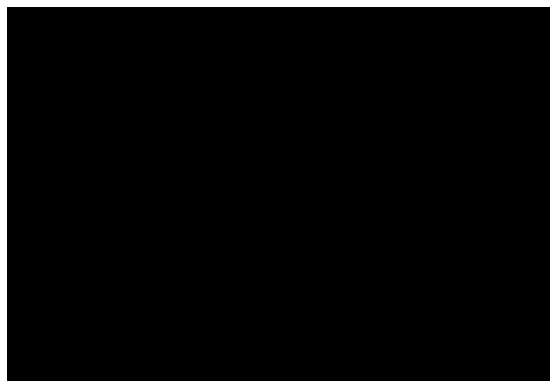


図4 東横堀の浜蔵（大阪城天守閣蔵）

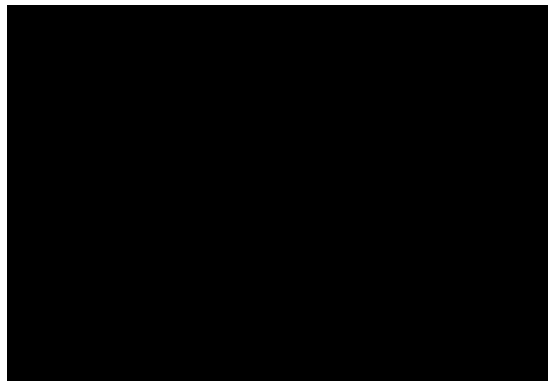


図5 高麗橋と東横堀の浜蔵

扇・6扇)では、本瓦葺きの町家や土蔵が密集する様子が克明に描かれ、町家の表構えも軒庇の前に木製の付庇が設けられており、大坂の町家の特色がうまく表現されています。八軒家の浜では、大川に張り出した雁木や町並み、その背後に高くそびえている釣鐘屋敷の櫓なども、他の絵画資料と矛盾が少ないようです(左隻4扇・5扇)。東横堀の高麗橋のたもとの場面(左隻4扇)では、川の東岸に足駄造りの浜蔵が、西岸(手前)には2棟の櫓屋敷の上層階(3階)が描かれています。東横堀の浜蔵は近代の写真が残っており、その描写がリアルであったことがわかります(図4・5)。屏風絵にこの風景が描かれることは稀で、大坂の町に精通した絵師の手になることが窺えます。

### 3. 「浪花名所図屏風」と「浪華名所独案内」

「浪花名所図屏風」の構図によく似たものに、天保年間以降に成立した「浪華名所独案内」<sup>なにわめいしよひとりあんない</sup>があります(図6)。この名所案内は大坂の町を東を上にして描いた地図です。とりわけ、地図の下(西)には淀川の下流である安治川と木津川の河口が左右いっぱい描かれています。そして目印山(天保山)を右下に配するなど、実際の地形を大きく歪ませて地図に収めています。「浪花名所図屏風」右隻の下半分に配置された淀川河口の風景描写は、「浪華名所独案内」の構図と相通ずるものがあります。

新発見の「浪花名所図屏風」は、数少ない大坂図屏風にさまざまな話題を提供してくれます。今後の研究の展開が楽しみな、大阪の研究にとって第一級の資料と言えるでしょう。

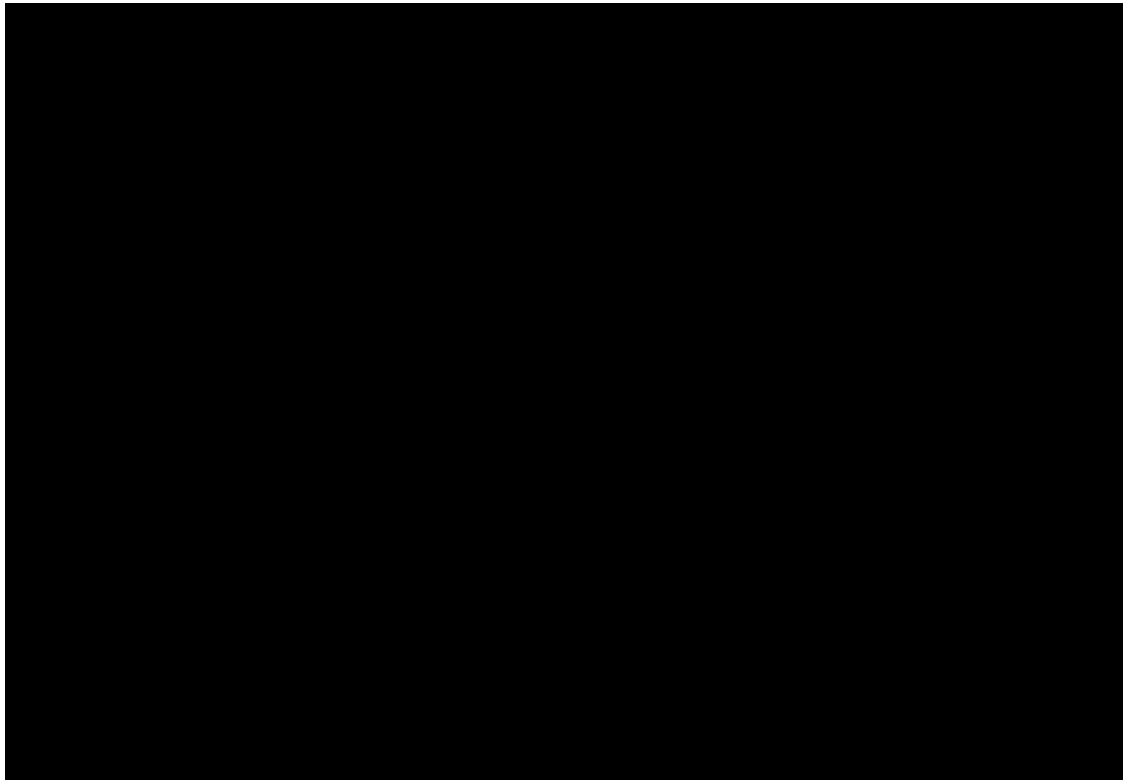


図6 「浪華名所独案内」(大阪歴史博物館蔵)

《講演録》

## 二つの屏風が語る大坂

### ～「豊臣期大坂図屏風」と「浪花名所図屏風」～

《講演録》新発見「浪花名所図屏風」

ケルン大学名誉教授 フランツィスカ・エームケ

皆様、こんにちは。エームケと申します。

まず、御丁寧な御紹介ありがとうございました。今日は、私は2年前に発見したばかりの、この目の前にある屏風一双についてお話したいと思います。

この屏風はご覧のように、本間サイズぐらいで高さが1 m 6 cm、幅は3 m 75 cmぐらいです。木枠の縁を入れて。これは非常にいい発見でした。なぜかという、なかなか大坂の絵画資料はないのです。特に屏風はありません。そういう意味で非常に文化史の上で大事な作品です。これからの研究ですから、まだ2年しか関西大学の皆様とか、大坂くらしの今昔館の館長でいらっしゃる谷先生とか、いろいろな方々も入れて一緒に研究し始めたばかりですから、今日のお話の内容は、恐らく、また来年、再来年もう一度お話ししたら、またちょっと変わるところはあると思いますが、それでも、今日はこの屏風について御紹介したい。

この一双の屏風には百余りの名所があります。これは名所図屏風ですから、それ全て説明すると3時間、4時間、5時間ぐらいかかるんじゃないかと、ちょっと長過ぎて。今日、私に与えられた時間が30分か40分ぐらいしかないから、じゃあ、どういうテーマに絞りますかと思った時に、私は遊びの大好きな人ですから、この屏風の内容はやっぱり名所、風景画ですから、その中身もよく探してみれば、遊び場がたくさんあります。

だから、今日は、私は皆さんのガイドとして遊び場をご案内します。でも、遊ぶだけではちょっと真面目じゃないから、結局、建前も言わなければならない。遊びは本音。それは後ほど説明します。

まず、建前から始めますと、これはどういうお寺、どういう神社とか、どういう所なのかと。その後には本音、当時の人たちの本音だと思いますから、その遊び場もちょっとご案内します。

まず、大坂の当時の地図を見ると、ご覧のとおり屏風の一番上はいつも「東」にあたっています。当時、大坂城は一番上の建物ですから、それは一番上の席です。大名屋敷もそうでした。東から西まで大坂は発展してきました。だから、実はこういう地図を見ていると非常に縦長い。縦細長い。恐らく屏風と同じような時期に出版された地図「浪華名所獨案内」は、これはやっぱり旅行用です。縦長じゃなくて横長です、縦長の地図。これをこの部分まで大分あっていますけれども、この下の部分、ここは天保山とか安治川口とか、木津川はこら辺です。それはどうすればいいのかと。横長に入れるとこんなことになってしまいます。これは東横堀川です。これは西横堀川です。だから、こら辺まで、当時は今みたいに明確さがなかったんです。縮尺がちょっと違っていた。私たちは今本当にその通りでしか満足ができませんけれども、でも大体あっていれば昔の人たちはそれで満足しました。ここにいろいろな道、住吉への道とか、四天王寺への道とか、案内しています。自分で旅行して持って行って、あそこを曲がればこういうお寺とか、神社とかがあるとわかります。ただ、こういう部分は実はこの下にあるはずなのに、これを折り曲げてこっちの海の、実は四天王寺、これは屏風の方がもっとよくわかります。左隻じゃなくて右隻をご覧になると思います。これはこっちの部分は実はこの下



にあるはずなのに、これは海です。これ全部一緒になってしまった。だから、右隻は非常に混乱しています。左隻は割と地図通りというか、当時のあった場所のように書かれています。

でも、もちろん、当時は大坂の屏風はほとんどないのですけれども、他の絵とかと比較すると、必ず4カ所はあります。これは天満宮、大坂城、四天王寺、こっちの右隻のほうで住吉大社です。

これもこの屏風にちゃんと描いてあります。

今度、ちょっと大坂の貿易、この屏風は江戸後期のものですから、江戸後期に大坂の貿易は非常に何と言うか、大坂は繁盛しています。商売繁盛ということで。だから一般市民もある程度経済の余裕がありまして、それでまた遊ぶことができました。昔は遊んでいる人たちは武士であったり、あるいは、非常にお金持ちの庶民でしたけれども、19世紀に入りますと、天保の飢饉とかいろいろあって後で問題が起きますが、その前の一般市民もある程度遊ぶことができました。経済の不満がそれほどでもなかった。もうひとつのことを前もって言っておきます。これはご覧のとおり屏風ですから、ハレの世界をあらわしている。普通のときは出さないんです。何かの結婚式とか、何かのお祝い、あるいは、偉いお客さんがみえた時にしか出せない。そのときやっぱり貧乏な場面とか、どこかぼろぼろの家とか、それはやっぱり見せてはいけません。そうだったら、ハレの世界から、ハレとケの世界に戻ってしまうから、そういう場面は一切ない。物乞いをする人とかそういう人はいたんでしょうけれども、それは全然描かれていません。

まず、最初にご覧になるように絵師は川を強調しています。こっちもそうです。ここは大川です。だから川がたくさん描かれています。なぜかという、大坂の道は、当時は川でした。何々堀、何々堀川とか、私はものすごく苦労して頭に入れるんです。川の名前は幾らでもありますから、大坂の人じゃないからちょっと苦労しましたけど。だから、この屏風にもやっぱり船がたくさん描かれています。これは今のゾーンに戻りますと、菱垣廻船といいます。結局、江戸か北海道まで船で行っている。ちょっと大きい船です。それを菱垣廻船といいます。他の史料もありますけれども、それは安治川橋まで操行ができて、そこからもっと小さな船、上荷船、茶船とかいろいろありますが、荷物を積みかえて大坂市中に運搬しました。ちょっとモダンといいたいでしょうか。私、この場面が大好きです。菱垣廻船。

やっぱりいろんな品物が入ってくると、あるいは大坂を出ることもあったけれども、入ってくると次は市場が大事です。これは他の市場も描かれていますけれども、当時の有名な魚市場です。雑喉場といまして、ここでは雑喉場、魚市場が天満の青物の市場と堂島米市場と大坂の三大市場でありました。その中のひとつでした。ここでご覧の通り、ちょっと早い船で新鮮、これは朝市の場面といえます。実は市場は朝、昼、夕がありまして、でも朝一番が新鮮なお魚、種類にもよるんでしょうけれども、これを早い船で運んできて、ここからこの長浜。とにかく倉庫を今ちょっと名前は出てこないんですが、ここに入れてここで売っているわけです。昔の作品の場合は屏風でもほかの絵でもたくさんの人たちは描かなくていいんです。ひとりぐらを描いたらたくさんの人たちはこういうふりをしたという証拠です。ここでわあわあみんな、これが欲しいとか、値段が高過ぎるとか、いろいろもめているんです。だから、雑喉場市場は大事でした。

これも恐らく皆様、御存じでしょう。これは昔、堂島の米市があった。そこで本物の米を売るわけじゃなくて、今みたいに市場は相場と同じように売ったり、買ったりしました。実物はその藩の蔵に置いてあって、そこから後で買ったら出してきます。これは何かわかりますか。これは人が登って物見と言いました。その上で雲行きのように値段が上がったり、下がったり、なんか決めたか、想像したかよくわかりませんが、そういう物もちゃんと文献に見つけたからこれもちゃんと描いてあります。

これは四ツ橋。また、四ツ橋という地名もあります。四ツ橋は夕涼みで有名なところでした。やっぱり四つの川があって、2つは交差していますし、橋も4つあって。夏は暑いですが。特に大坂は暑いですが。私ドイツ人だから、夏にはあまり大阪に来たくないです。その時はまだクーラーのない時代にはどうやればいいのかと。ここは特に涼しかったみたいです。四ツ橋には煙管屋のお店もちょっと幾つかみえます。これは煙管屋です。ここら辺の煙管屋が有名でした。この絵ではどっちが有名なお店だったのかちょっとわかりませんが、でも、かなりディスプレイは違います。長いのか短いのか、これはいろいろ当時、みんなたばこを吸って、長かったんです。煙管が。女性も吸いました。禁止ではなかったです。煙管。

あと、これは面白話です。黒焼屋。何か御存じですか。これはほれ薬を売ってました。動物や植物はそのまま土瓶に入れて焼いて黒く。これはディスプレイ。ちょっとこれはあんまりはつきり描かれてないんですけども、でも、すぐわかります。それを売ったらほれ薬らしいです。それで非常に有名なお店、よく儲かったと思います。大坂人は商売上手です。今でもそうだと思います。

とにかく経済は発展しまして余裕ができて、どういう所で遊んだのかと。もちろん今と変わらない。特に新町が形成の頃は。ここで太夫、大坂で一番位の高い遊女。一番位の高い遊女は「太夫」といまして、1678年に亡くなったこの夕霧は当時非常に有名でした。その八百屋という老舗は京都の島原からこの大坂の新町に移転して、その夕霧はすごく評判が高かった。だから、近松門左衛門とか、当時の作者がたくさんの芝居を書きました。

私が最初にこれを見たら恐らく江戸後期の太夫ではないのじゃないかと思って、でも結局ここに扇のマークが書いてある。長い傘に必ず属しているお店の紋が描いてある。これは扇屋だから、夕霧に違いないんです。それはパターン化されて、後に新町の絵の中に必ず夕霧が出てきます。だから、この屏風でもずっと後、200年、150年後にしか描かれていないけれども、必ず出てきました。その道中の場面です。若い遊女二人を連れて、ここで男もいます。長い傘を差して道中します。これは有名な場面です。

今度、やっぱり本音と建前の話に戻りますが、この屏風に住吉大社が大きく描かれていますが、それは皆さんお参りする、それは建前です。でも、実はそのお参りの帰り道、後、いろんなお店があって、料理屋とか、お土産品とか、そういうお参りの途中で遊びました。住吉新家は住吉に近く、新しくできた住吉街道に沿って新しくできた村ですから、そこで私はその場面



を案内したい。

これは『東海道中膝栗毛』にも出てきます。この屏風に描かれた料理屋は伊丹屋だと思えます。有名で名前も知られているレストランがあって、その様子は御存じです。『東海道中膝栗毛』、弥次喜多が主人公であって、1802年から1804年の間に8回大坂の描写が出てきます。その十返舎一九は大坂に長く滞在しましたから本当によくわかっています。

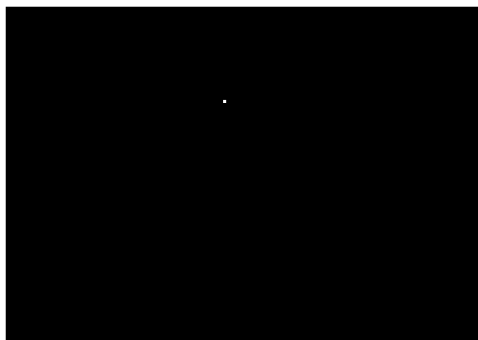
東海道中膝栗毛では弥次喜多が住吉新家をとおり過ぎるときの様子を次のように描写しています。「げにもこの御神の繁盛をましますことは両側の茶屋にあらわれ、いずれも家作美麗にしてあかまえだれの女、角に立ち並び、お休みな、お休みな、お支度なさらんかいな。蛤のお吸い物もございます。鯛もヒラメもござります。お入りな、お入りな」もっと私はうまくできませんけど、こういう場面がありますから、だから、住吉の新家の絵はやっぱりこの文章を絵にしたような印象が強いです。

これは赤前掛け。お入りなと言って、これはちょうど二人は通っているから、やっぱり弥次喜多みたいなお客さんです。

もう一つの、当時は一番有名な料理屋がありました。そこはやっぱり高かったから、お金持ちでないと恐らくお食事ができなかったと思います。浮瀬といいます。この浮瀬は2階建て、たくさんの建物があつたわけ。ここは一つしか見えないけど、2階建ても座敷、ここも座敷、実は青いはずなんだけど、その画像でちょっと見られませんが、畳という意味です。だから、高いお店という証拠でもあります。ここで女ひとりが三味線を弾いてそれを聞きながらお互いにお酒を飲んでいました。こういう場面。この浮瀬は貝の名前です。浮瀬という貝杯は鮑の貝です。11の穴を塞いで飲んだ、ここで数えたら11の穴があるらしいです。酒を盛れば7合半入った。これを晩酌して飲んだ人は誉として、暢酣帳という名簿に名を記すことができました。この図に、これは説明書なんだけど、こういういろんな面白いオランダ渡り貝とか、いろんな貝から杯をつくったんですって。

これは有名な道頓堀です。これは日本橋、私はずっと東京にいまして「ニホンバシ」しか頭に入らなくて、こっちの大坂にきたら「ニッポンバシ」です。天下茶屋は「テングチャヤ」です。難しい、外国人にとって難しい。それは日本橋、これも人が多いということです。あまり多くに見えません。でも、やっぱり人数が幾つかありましたから、やっぱり往来は多かった。これは高札、これは髪結いです。これもどこかお城に行く途中の大名でしょう。やり持ちもついて、そういう大名行列はパターン化されて、日本橋には高札があって、お侍さんの友連れの場面です。ここはいろは茶屋47軒の茶屋が並んでいたからいろは茶屋といまして、この屏風の中にはこの竹田座しか書かれていませんけれども、いろんな芝居小屋が並んであって、芝居を見る前か、あるいは、後でここでお茶を飲んだり、宴会したりしました。これは有名な竹田座です。なぜ有名なのかと、それは、からくり人形の芝居でした。その歌舞伎と能は盛んにありましたけど、からくりは人形です。人形は歌舞伎と同じような芝居をしますけれども、人形だからおもしろかったんです。それほど有名だったから、そのからくり、竹田座のからくり芝居を見なかったら、大坂には行かなかったとされます。オランダ人も竹田座に寄ってびっくりしました。記憶があります。

これは幕です。その3枚の笹ですか。竹をこっち



に立てて、これは恐らく役者の名前かそれは全然字は読めません。あるいは、その芝居、きょうは何を演じるのかとかが書かれています。そこまで私は専門家でもないしわかりませんが。

大坂に物すごくたくさんのお祭りがありました。でも不思議にこの屏風には十日戎、今宮蛭子の十日戎のお祭りしか描かれていません。それがちょっと不思議とあって、いろいろ説明があるんでしょけれども、ひとつはちょっと小さく上のほうに書かれていますから、一見してどんな神社であるとはわかりません。だから、やっぱり特別に何か描き入れないと。これは今宮蛭子宮だと、人は笹を買って持って行って、ここでいろんな縁起のよいものを買って、それを笹につけて、だから、福笹と言いました。それをここで買ってお参りして、うちへ持って帰って繁盛のために。商売繁盛の縁起のよいものとして家で飾ったのです。

これは御存じのように有名な天満宮です。天満宮はこの建物は今はないのです。ここに大体割とリアルに描かれている建物は恐らく焼失した前の建物です。だから、天保前半だと思えます。それは後で恐らく谷先生がもうちょっと詳しいお話をなさると思います。この天満宮も表は建前にはまたその言葉に戻りますと、お参りに行くんです。でも、天満宮の境内はいろんな遊びがあった、そのいろんな小屋を出す店が出て、それで落語みたいな当時のいろいろな話をしたり、いろいろ何かの食べ物も売ったりしたり、これは紙芝居のような。紙芝居はまだなかったけど、当時の短歌は専門家ではないからわかりませんが、いろんな遊び場があって、だから、楽しんだ、みんな。これはその部分でよくわからない。そこでなんかを見せて説明する、ここでなんか売っているみたいです。お菓子か何か。いろんなそういうところが出店が出ていますから、天満宮のお参りは非常に楽しかったです。

これは名所、風景図といってもいい。名所図屏風といいますけれども、名所風景図と言ってもいいような屏風ですから、もちろん四季も入っています。本当の四季じゃないですよ。ここは春、お正月、あれは十日戎は1月ですから、お正月から6月までしか描かれてない。秋と冬の間は暗示しているか、暗示していないか。それをはっきりと描かれていませんけれども、今、お花見というと、大体私もそういうふうドイツで習った日本学で習ったのは、花見は桜です。今は大体花見だけ言ったら、桜の花見。当時はそうじゃなかったんです。いろんな梅の花見、これは桃。ここら辺の中野観音と言いまして、その周りに桃畑でいっぱいでした。だから、花の盛りには花が咲いたらすごくきれいでした。これは桃谷と言いまして、空堀、お城の空堀に植えました。それは桃の花見で。これは桜ノ宮。今でも桜の花見で有名です。もちろん桜がきれいに咲いています。ここ淀川でしょう。向の岸、大坂で浜といいましたけど、もう桜の木でいっぱいでしたから、非常に船で来ている。そのお花見を観覧する人たちもたくさんいます。ここは三十石船で恐らく京都の途中でわっと両腕を挙げて、「わあ、きれいだな」とか何とか言っている人も描いてあります。ここは緋毛氈やっぱりピクニックもできた。だから、ここも有名なレストランもありました。だから、お参りをかねて遊ぶこともよくできました。

これは野田の藤。藤の花見にもとてもきれい。盛んになりました。これは長い房です。昔から有名なところですよ。ここはまた、緋毛氈を持って行って、参っている人は花見じゃないでしょうけど。これは豊臣時代からあった藤の茶屋。それでたくさんのお店茶屋とか、この境内にあったとわかります。神社は春日神社ですけど、これはメインじゃないです。この場面から言えばやっぱり花見はメインです。これは有名は難波の南御堂とも、裏の御堂とも言いまして、すごくすてきな立派な建物でした。今もそうかもしれませんが、私残念ながら行ってないのです、現代のは。

不思議にこの屏風の中でここだけ裏から拝見します。普通は表から描かれている。これだけ

裏から描かれている。立派だけでも、なぜ裏からかというところに霧島五月躑躅が植えてあります。この太い石垣の上に。だから、これは一つの裏から見えるのがポイント。もう一つのポイントは、これは穴門といいます。これは摂津名所図会と同じような場面が描かれている。おわかりになるのかしら、これは非常に深い、穴門は深く奥行があって、そこは夏でも非常に涼しかった。そこで瓜を売っていました。冷やす必要もなかったみたいです。そこに置いておいて、涼しかったし、ここで食べている人が場面にみえます。これは西瓜。西瓜は夏には一番のごちそうでしょう。暑いとき。ここも出店いっぱいありました。これも出店。これも少ししか描かれてないけれどもすごくにぎやかでした。あそこで。だから、御堂をお参りしますが、その後でやっぱり西瓜を食べたり、いろんなことで遊んだりします。



これは杜若、今菖蒲の花のほうをいうかもしれません。私も違いはよくわかりませんが、当時は杜若と言いました。これは有名な了徳院。浦江村にありました。この了徳院も、この杜若も浦江の杜若といいまして。それもまた、お花見の名称でありました。紫の菖蒲か杜若もまぜてあって、きれいだったみたいです。

この中之島、非常に小さく見えるけども、「浪華百景」という浮世絵シリーズの中にこの同じところの図があって、ここでちょっとお店、残念ながらこれはスライドに入れるの忘れたけど、それはその島の上に3軒の茶屋もありました。ここではこれは描かなくてもよかったみたいです。だから、小さくしか描かれなかった。

見晴らしのいいところも名所になりました。これは高津宮です。今でも割と残っています。ここら辺の部分、この石灯籠も去年見に行って、またそのものがあるんです。不思議に。この2基の石灯籠。実は、これは1基しか描いてない、建ってないけど、ここにもうひとつあって、3基が残っています。これは何だとおわかりですか。これは遠眼鏡、だから、遠眼鏡を2つオランダからヨーロッパのいろんなものが入ってきて、江戸初期は幕府しか使わなかったけど、恐らくこの遠眼鏡は日本でつくられたものだと思います。鉄砲もそうだし、全部日本人は器用ですから、すぐに自分でつくって。この人は今は機械だけど、「はい、何々銭」とかお金をとるのです。実はここ彼の番小屋もありまして、でもそれは省略されています。

これはまた、舞台の上に茶屋がありまして、ここからもうそれは道頓堀から東に直接あった高津宮、だから、ここから道頓堀川とか、市外にもすごくいい見晴らしができたところですよ。だから、それも一つの楽しみでした。

ではこれで最後になりますけれども、なにわ橋に納涼船。この屏風の中に納涼船しか描かれてないけれども、実はこっちの浜。なにわ橋の北ですか。とにかくこっち側にずっと茶屋が並んで、そこで一般の人たちは夕涼みをしました。私は暑くなりましたから、最後にこの絵でちょっと涼しくなるという。きょうは幾つかの例しか簡単に説明できななかったけど、恐らくこれでもおわかりに、またどんなに文化史的に重要な作品なのかと資料なのかとおわかりいただけたと思います。

どうもありがとうございました。

謝辞

本研究にあたり、「浪花名所図屏風」ご所蔵者のほか、以下の方々のご協力を得ました。ここに記して深く感謝申し上げます。(敬称略)

高橋隆博 常行貞臣 速水裕子

---

---

平成27年度関西大学創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）成果報告書

新出「浪花名所図屏風」の研究

発行日 平成28年3月31日  
発行所 関西大学なにわ大阪研究センター  
研究代表者 長谷 洋一  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
印刷所 (株)NPCコーポレーション

---

---